

之に對して、鹽の如き重量品は運賃の變動により其の價格が左右される事多く、アフリカ鹽は偶々歐洲向滿洲大豆の復荷として割安に輸入し得しも、十一年下半年からの世界的運賃昂騰により、既に苦杯をなめさせられ、今後その輸入増が圓滑に運ばるるや否や平時すらも常に一問題たらんとする。況んや自足化の建前から云へば、その需要の大半を輸入に仰ぐの不當なるは固よりである。

三 支那鹽

全支産額 支那は鹽を鹽稅の對象物として輸出を喜ばず、限産されて池鹽、井鹽、岩鹽、海鹽何れも自給に止まつた。海鹽は北支、中支、南支の沿岸一帯に亘り、五箇年の平均産額北支千萬擔、中支千七百萬擔、南支六百萬擔である。

(A) 中支は揚子江口を中心として以北は兩淮、以南は兩浙鹽、即ち江蘇浙江兩省の海岸。

(B) 南支は福建を中心各所に鹽田がある。

併しながら、開發の餘地と容易さは北支に残る。

北支長蘆鹽田の長所

鹽の産地は、

(A) 雨期が集結し、然も雨量及び降雨日數少なく且つ氣温高くして乾燥し、常に或る程度の風があり蒸發量の高き事。

(B) 地勢は平坦にして廣大、經營單位を集團せしめ、土質は粘固結的で海水を漏洩せざることを必要とす。以上の點に於て、北支渤海沿岸一帯の長蘆鹽田は、中・南支及び臺灣よりも適地とせられる。

現在同所の産高は四十萬噸内外なるも、之は休田の多き事並びに生産方法の不合理等に基き、若し之を改善指導せば、一町歩當り生産力平均四十噸を六十噸にする事も不可能でなく、休田の操業並びに改善擴張せば百萬噸の生産も難事でない。

四 ブロック増産五箇年計畫

斯くて日滿支に於て計畫せられたる増産五箇年案は左の如し。(單位千噸)

	昭和十年産高		五箇年後	
	産高	内地	産高	内地
臺灣	一四八	二〇〇	一五〇	
關東州	五〇六	六〇〇	四五〇	
滿洲	三九六	一、一〇〇	八〇〇	
長蘆	三五〇	一、〇〇〇	五〇〇	
青島	一八〇	三〇〇	二〇〇	
計	一、五八〇	三、二〇〇	二、一〇〇	

現在、右の諸地より七十萬噸輸入してゐるが、五箇年後には二百萬噸であるから、差引百三十萬噸がブロック内で自給力を強める事になる。

何れにしても五箇年後のブロック内供給力は、内地供給力を現在の五、六十萬噸程度と見て、二百五十萬噸あり、その需要力は工業用が二百萬噸、食用百萬噸とせば、差引五十萬噸の不足となり、現在の外産百二十萬噸依存に比し、遙に自給力を増す。

尙ほ青島は支那鹽稅の關係にて減産せるもの多く、従つて大した擴張費を要せずして上述の増産計畫を遂行できる。

また朝鮮は西海岸に鹽田開拓十萬噸計畫をしてゐるが、現に山東・青島・關東州からの輸入が十五萬噸を算し、現在の生産量十五萬噸と合して三十萬噸の需要であるから、將來も内地への移出餘力はないだらう。

第六 日滿支ブロックの價值

斯くて日滿支ブロックの價值を要約すると次の通りであらう。

(A) 鐵・棉・鹽については、その自給力が充分でない。

(B) 石炭は品質分量とも充分であるが陸海の運輸狀態の改善を前提とし、之には今後なほ十年を

要する。

(C) 従つて石炭・鐵のごとき、若し海洋に求められるならば、運賃の點で海は少なくとも陸の二十分の一以下で濟む利益がある。

(D) この他、支那では現在(昭和十五年九月)蔣政府下にある湖南等にはアンチモニー・タングステンとも世界有數のものがあり、タングステンの如き殊に世界産額の四〇%を占めてゐる。さらに水銀・錫も豊富であつて、しかも既に開發されてゐるから、その利用價值は大である。

が、何れにしても日滿支ブロックだけでは、石油・ゴム・棉花・羊毛・パルプを缺き、鐵も充分でなく、銅・鉛・亜鉛・ニッケル・アルミ等も頗る不充足である。

昭和十五年の春以來、南進論が再擡頭し、南洋を包含せる大東亞經濟共榮圈の叫ばれるのも、その由つて來るところが遠く且つ深いのである。

第八章 南洋圏の經濟價值

第一 太平洋時代の意味

太平洋時代とは、云ふまでもなく地中海やバルチック海の入内海時代から大西洋時代を経てきた最大、最高段階の海洋時代である。この太平洋に額の寶玉的地位を占むる者が日本であつて見れば、ここに日本が偉大なる歴史的使命を持つや、云ふまでもない。何ぞや、歴史的には最後に取残されたるこの太平洋に面する地域を立派に開發して、世界文化の進歩に貢献することがそれである。内村氏が「地人論」で説いた神の豫定を果すことである。

一 太平洋時代の出現

(A) スエズ及びパナマ兩運河の開設、

(B) 太平洋岸が廣大にして資源が豊富なるのみならず、それが石油・ゴム・錫・アルミ・ニッケ

ル・鉛・亜鉛・マンガン・タンングステン、さては鐵礦から石炭まで凡そ現代の高度工業と國防國家の建設に不可缺の資源をすべて豊藏する事、

(C) 海運の利便をもつ事である。

まづスエズ運河は一八六九年、パナマ運河は一九一四年の開設であるが、スエズ運河の通航船も十九世紀中は一年一千万噸に達しなかつた。それが一九一三年には二千万噸、一九三六年には三千二百万噸に達した。またパナマ運河は開始翌年一九一五年に五百万噸であつたが、一九三六年には二千六百万噸の船舶が通過してゐるのだ。(三菱經濟研究所「太平洋に於ける國際經濟關係」一一頁以下)

太平洋を廣義にとり、その港が太平洋に面せるものとしてアジア太平洋岸(滿・支及び印度包含)及び大洋洲、これにアメリカ太平洋岸を包含するならば、わが國の貿易はその輸出の七五%その輸入の八〇%がこの地域で占めてゐる。狹義に解してアメリカ太平洋岸を除き、アジアの太平洋岸と大洋洲に限るも、輸出は一九三六年で五二%、輸入は四六%を占めてゐる。

英國の貿易でもこの東・南洋貿易はその全輸出の二三%、輸入は二四%を占めてをり、他の残りの屬領植民地貿易に匹敵するのである。(The Statesmans Year-book, 1939, P. 62)

この傾向は獨り日・英だけではない。列國が皆然りである。即ち次の通りである。(三菱經濟研究所

「本邦財界情勢」十四年十月號)

東亞及び南洋市場に於ける列國貿易の地位

	輸出貿易 (一)					輸入貿易 (二)				
	日本	米國	英國	獨逸	佛國	日本	米國	英國	獨逸	佛國
東部アジア	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
一九二九年	三三・九	一四・三	九・五	四・〇	〇・九	二〇・三	二〇・九	六・五	一〇・〇	六・〇
一九三二年	一四・九	一三・〇	八・八	三・五	〇・九	一九・八	一一・一	七・九	一三・五	二・九
一九三七年	四七・六	一七・一	八・七	一四・七	一・七	三二・八	二九・〇	三・〇	一六・二	三・四
一九三八年	五五・二	二二・二	六・一	九・五	一一・一	四八・一	一五・九	一一・四	三三・〇	二・三
南部アジア										
一九二九年	六・八	八・八	二三・四	四・六	二・七	七・三	三三・〇	一七・八	八・七	六・〇
一九三二年	一〇・五	九・五	一九・四	四・六	三・二	六・二	一九・七	一八・八	七・四	六・三
一九三七年	三三・八	一一・〇	一七・二	四・六	二・六	一〇・一	二五・六	一九・七	七・二	六・六
一九三八年	七・八	一一・一	一六・六	五・四	二・五	六・八	一九・四	三三・二	八・〇	六・四
大洋洲										
一九二九年	二・五	一九・六	三・〇	二・三	一・四	六・九	六・四	五・六	九・四	一一・九
一九三二年	四・三	一三・一	三・八	二・五	一・七	一〇・〇	二・〇	六・九	六・七	六・六
一九三七年	四・一	二二・二	三・三	二・五	〇・六	七・一	七・四	六・六	四・二	七・二

註。 各國の金換算貿易額を基礎として計算せるもの
 (一) 地域別の各輸入總額に於ける各國の輸出貿易の割合 (二) 地域別の各輸出總額に於ける

各國の輸入貿易の割合

上表の示すが如く、日・米・英・獨・佛とも各國貿易のその東・南洋に對する貿易比率は、一九二九年と一九三七年とを比較して増加してゐる。一九三二年は世界恐慌の大底時代であり、一九三八年は三七年好況の反動時代である爲に減じてゐるが、各國ともその好況時に東・南洋貿易の比率が増加せることは、偶々もつて東・南洋が世界好況と密接なる關係あることを證するものに外ならぬ。

米國の景氣が一度び動いて自動車の生産高が増加せんか、南洋のゴムは直ちにその需要が増加し、その價格が暴騰する。錫その他も同じであつて、それらは同時に國防産業とも消長を共にするものである。ゴムにしても石油にしてもクロム・アルミ・ニッケル其他鹽すらも、第一次歐洲大戰後にその眞價を發揮した最新、最重の軍需資源である。

石器時代から銅時代となり、ついで銅に錫を合金して青銅を考案したことが如何に武器の硬度を増し、その逸早き利用者が人種争鬭の攻勢者たり得たかを知らば、今これ等のアルミ的輕金屬と鋼との合金によりて、輕快にして然も硬銳なる特殊鋼をより多くより早く利用する者が、いかにこの歴史的轉回期において能くこれを乗切ることができるか。現實に今次の英獨戰も、爆彈と特殊鋼の攻防戰に

過ぎず、その何れかが少しでも科學的に勝れる方が最後の勝者となるのである。

東・南洋は敘上の尖端的資源の包蔵所なのである。世界が國防國家の完成に急げるとき、南洋が世界注視のま^ととなるのは偶然ではないのだ。

二 米國と南洋資源

資源に満ち足れる米國すら、南洋と貿易が遮斷されんか、ゴム・錫・キニーネ及び防毒マスク用に最適の木炭源たる椰子の實を失ふのである。

ゴムは合成品も可能ではあるが今のところ高價である。南米のゴムも全世界生産高の二%しか産出しない。一九三七年の世界ゴム産額は十七萬噸であるがマレー(六萬)蘭印(三萬)タイ(一萬)、これにビルマ其他の南洋地方で七〇%を占め、しかも米國は世界産額の四〇%を消費してゐる。

錫はポリビヤから得られるも、とても米國の需要は充たされない。世界産額は最近十八―二十萬噸であつてマレー、蘭印で六〇%を産出するが、米國は世界産額の五〇%を消費してゐる。

「持てる國」米國にして既に然り。その他の國は云ふまでもなく、石油や既述の輕金屬をはじめ、麻・毛皮・棉花・石炭及び植物油に諸食料品など、なに一つその食慾をそそらない者はない。

三 太平洋の特殊價値

東・南洋はその資源が時代的のものとして、世界の眼の焦點たるのみならず、資源の埋藏地が働きやすい熱帯地にあり、且つ海運の便あるところに特殊の價値をもつ。

寒嚴なシベリアは問はず、山西の石炭すらも奥地深くあるが故に、地質學的には價値あるも經濟的にはその價値が發揮されない。東・南洋の資源はこの海運の利用性に富むだけでも遙に他を凌ぐのである。況んや資源の種類は時代の尖端をゆき、量もまた世界的なるをや。

ここに太平洋時代がある。

第二 南洋と我國

支那事變後殊に歐戰後のわが貿易は米國からの大入超を示せるも、それ等の多くは將來南洋貿易で身代りできる物である。石油・鐵・銅・燐礦石などがそれであり、その他の輕金屬も亦然りである。

一 英領マレー主要輸出品

●まマレー・フィリッピン・蘭領印度の主要輸出品並びに産物を見るに左の如し。(三菱經濟研究

所「太平洋に於ける國際經濟關係」三一九頁）（單位千弗、千噸）

	輸		出	
	一九三五年	一九三六年	一九三五年	一九三六年
錫	價	五九〇	價	五二〇
	分	二五九、〇九四	分	三〇三、三一五
コブラ	價	六二	價	八三
	分	一一七、二九四	分	一四一、三五三
米	價	二一七	價	一九六
	分	一六、八五六	分	一九、〇三七
米	價	一八四	價	一八二
	分	一一、〇六一	分	一〇、八四六

進んでマレー鑛産物を見るに一九三五年度、金三千萬オンス、鐵鑛百五十萬噸、錫四萬二千噸、磷鑛石十五萬噸、マンガン三萬噸其他であるが、鐵鑛は含有鐵六四%の良質であり、且つ開發の餘地をもつてゐる。他にタングステン鑛・マンガン鑛もある。

ニ フィリッピン主要輸出品

一九三六年のフィリッピン輸出は砂糖（一二三百萬ベソ。一ベソは米價五十仙即ち半弗）、アバカ（麻、三

四）コプラ（三〇） 椰子油（二八） 煙草（一〇） 其他は木材等であるが、最近は鑛物が漸増してきた。左の如し。（三菱「本邦財界情勢」十五年一月號七四頁）（單位噸）

比島鑛物の輸出高

	輸出總計				日本向輸出		米國向輸出	
	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
鐵 鑛	六五、四五六	六〇、一八八	九一、〇九三	六五、四五六	五九、七三三	九一、〇九三	—	一、四七三
マンガン鑛	二五五	一一、二〇六	四九、三五九	—	七、四九一	四九、〇〇三	二五四	四、七二五
クローム鑛	一一、八九一	六九、八五六	六六、九一一	二、〇八五	三、七二二	一、九二五	九、二〇六	六五、三三七
銅 鑛	六	一五、八五六	二四、一〇〇	—	一五、四三三	二四、一〇〇	—	—
屑及故鐵	二、四六三	六、八四四	三、〇九	二、三三八	六、五〇七	三、九〇〇	—	—
屑及故銅	四三	三六	三七	—	七	六	—	—
鉛 鑛	—	二四	二六	—	二四	—	—	二六

比島の鑛産は最近着目されたもので、その將來はすべて頗る發展性に富むが、例へばクローム鋼の原料として軍需工業に缺くべからざるクローム鐵の如きも一九三三年までは何人も知らなかつたのである。それがガロン島・ミンダナオ島に互る外基岩中に含有量五〇%以上の良鑛脈が発見され、米日に積出されたのも一九三五年後であり、次第に世界市場に進出しつつある。因にクロームの一九三

七年度世界産額は南阿（四五萬噸）ソ聯（二二）トルコ（一六）玖瑪（一〇）であるが、比島は若いだけに今後が期待される。（南洋經濟研究所「研究資料」昭和十四年四月號）

三 蘭印主要輸出品

蘭印はジャワを中心としてスマトラ・ボルネオ（北四分の一は英領）、ニューギニア（バプア島東半は英領）・セレベス・チモール其他の諸島から成り、全面積一九〇萬平方呎である。和蘭本國の五十八倍、全日本の三倍である。ニューギニアの如き英領を合すれば、その一島で日本の三倍、アフリカのマダガスカルと共に世界の最大島である。人口はジャワが四千萬であつて密度一平方呎三百十六人、日本内地の百五十人の倍に上るも、他はボルネオ四人、ニューギニア十人、スマトラ十七人である。主要輸出品は左の如し。（雜誌「太平洋」十五年四月蘭印號）（單位千噸、千ギルダー）

蘭印主要輸出

品名	輸 出 量		輸 出 金 額	
	一九三六年	一九三七年	一九三六年	一九三七年
イ ム	三四八、四四九	四八三、一二四	八七、七九七	二九八、一一八
藥品 香料	一五五、五一五	一〇八、四四五	二八、七八八	二六、五八七
コ ー ヒ ー	九六、七九三	一〇〇、五二三	一五、八五七	二六、〇四八

植 物 油	八〇六、二七七	八五〇、九八九	七〇、八二六	一〇四、六五八
砂 糖	一、〇一〇、三三三	一、三六五、二七六	三四、〇九五	五一、一〇九
煙 草	四九、七〇七	五〇、一七三	三七、八九〇	四一、〇八八
タ ビ オ カ	二九三、五〇一	四四六、六六四	一一、七七九	一八、三八三
玉 蜀 黍	一七五、二二〇	二一七、三五八	四、三九三	六、七六六
石 油	五、六〇一、五八〇	六、二八九、八一八	九七、四五八	一六六、六一五
古 鐵	六五、八六三	一〇三、七〇九	一、〇四八	二、九八一
錫 及 錫 錠	三九、四四四	五〇、九一七	四六、〇二四	八四、一一三

上表の如く、現在の輸出品は石油・砂糖・ゴム・藥品・香料・コーヒー其他であるが、鑛物として一九三七年は錫（四千萬噸）石炭（一四〇萬噸）ボーキサイト（一、三萬噸）マンガン（一萬二千噸）金・銀・ニッケル・硫黄・磷酸鹽など最近漸く開發されてきたし、鹽も増産できる。のみならず鐵の富鑛も頗る豊富であるが、技術的利用難と相俟ち蘭印政府は公表を喜ばない。

現在蘭印の投資は四十七億盾（一ギルダーは邦貨平價八〇錢）内十億盾餘は英國・華僑・米國の投資であつて、日本人もゴム園投資がある。蘭人は混血兒共で二十四萬人が文武官の上層を占め、その年收と恩給だけでも蘭印の負擔は可なり大である。和蘭本國人も本國農業者を除けば直接間接その大多數が蘭印關係の商工業で生活してゐる。以て蘭印が和蘭にとりてその生命源たる事が分るであらう。

和蘭は歐洲における覇權を夙に失つたが、ただ蘭印あるが故になほ能く現在の富榮を致す。一九三七年の和蘭貿易は輸入五億弗、輸出三億七千萬弗、入超一億三千萬弗であるが、その貿易總額は日本の十一億六千萬弗に對して八億八千萬弗を算し、世界貿易では英・米・獨・佛・カナダに次ぎ日本は第六位、ベルギーが第七位、和蘭は第八位である。のみならず一九三八年の金保有高は日本が僅か一億六千四百萬弗なるに和蘭は十億弗である。貿易の入超が上述のごとくして、その富は此の如く大なるは全く蘭印からの投資益その他に負ふところ多く、三菱調査によれば和蘭の蘭印からの年收は三億二千萬盾、本國豫算十億盾の三〇%に上るといふ。（「本邦財界情勢」十五年三月號三七頁）印度が英國の寶庫であり、種々の名目で印度から英本國に入り込む富が年々多額に上ることく、蘭印は實に和蘭の唯一の寶庫であつた。

じつさい蘭印だけでもその規那一萬噸は世界産額の九三%、胡椒やバーム油も之につれて何れも世界第一位、ゴム・コブラは第二位、砂糖・茶・コーヒー及び錫は第三位、米・煙草は第五位、原油は第六位である。原油の一九三八年度産額七百五十萬噸は日本産額三十五萬噸の二十倍、日本の石油消費量の二倍近くに上るのだ。以て蘭印が和蘭經濟を賄ふ唯一のお臺所なるを知るべく、今や米國とドイツが蘭印の運命につき多大の關心を寄せんとする理由も分明であらう。

四 タイ（シヤム）主要輸出品

シヤムは圓ブロック外に立つ東洋唯一の獨立國である。英國の上部政治經濟力と華僑の中部活動力によりてその經濟は運行してゐる。一九三八年輸出總額は千八百萬磅、輸入は千二百萬磅で、輸出は米を過半の首位とし、錫・ゴム・チーク材等、輸入は綿製品を主とする。

、鑛物は錫の他にウオルフラム・タンダステン・アンチモニー・モリブデン・マンガン・亞鉛・金・銀・銅・石炭を埋藏するも未だ開發されてゐない。

五 佛印主要輸出品

一九三八年の貿易は輸入二十億フラン、輸出二十八億フランであつて八億法の出超である。主要輸出品は米（十億法）であつて、玉蜀黍・ゴム・石炭がこれに續く。輸入は纖維品である。

鑛山物は石炭・錫・タンダステン・金・燐鑛石・亞鉛・アンチモニー・マンガン・寶石であり、すべて佛人の投資・經營になる。炭田の埋藏量も豊富であつて、我國はその石炭の主要輸入國である。さらに佛印の鹽は現在も輸出力があり、將來も一層有望である。

六 不可離の我國と南洋諸國

以上の南洋諸國とわが國との貿易を見るに、わが出超國は英印・蘭印・タイ・錫蘭・ニウギニア・ニウカレドニア・ニウジランドであつて、わが入超國は佛印・英領マレー・海峽植民地・フィリッピ

ン・英領ボルネオ・濠洲である。總輸出五億八百萬圓、輸入五億四千四百萬圓差引三千六百萬圓の入超であるが、これ等の地方は服飾品・雜貨の需要が旺盛であつて、而も日本品が品質や趣味も最適であり原價・運賃も安いのであるから、日本が將來これ等の地方から需要する物に對し充分の身代り輸出を提供しうるのである。(本節は拙著「海洋世界興亡史」による)

ただ、現在は佛印のごとき佛本國と我國との間に高率關稅の差があり、蘭印も割當制などの障礙あり、わが輸出も思ひ切つて進出できない。一度びかかる障壁を徹廢せばわが輸出は目醒ましく奔出するであらう。

殊に今後の世界が四大群にブロック化すると共に、南洋諸國はその必要とする工業品や、纖維品はもちろん、化學工業・機械工業品もまた日本に仰がねばならず、購買力薄き彼等には運賃安の日本品を求めることは何よりも利益でもある。同時に日本もその化學工業や重工業原料を南洋に求めるのが容易且つ經濟的なのであるから、兩者は互助連環以て共榮を圖るべき攝理の下に編み込まれてゐるのだ。或は地政學的に有機的一體を爲すべき世界經濟的必然性をもつてゐるのである。問題は兩者近接の努力如何である。

第九章 日本工業の高度化

第一 日本經濟の内包的發達

世界のブロック化に對して、日本が大東亞の廣域經濟を樹立するのは、日本經濟力の外延的發展である。だが、徒らに外延的發展を遂げても、その持つ資源を剩すなく活用するためには、どうしても内包的發達を完成しなければならぬ。

外延的發展は量と種類の問題であり、内包的發達は質の問題である。内包的發達とは何ぞや。いふ迄もなく日本工業の高度化である。輕工業から重工業へ。衣食品の消費財生産工業から機械其他の生産財生産工業へ。或は同じ纖維工業、同じ機械工業にしても、その低度な粗放性から高級精密性への發達である。

殊に化學工業・機械工業の高度化にして實現せざれば、いかに資源が豊富でも、寶の山に入りながら手を空しうして茫然と傍觀するに止る。これに反して化學工業と機械工業の發達に高度化せば、

ただ空氣と水と石炭と大豆のある所、さまざまの衣食品や化學品を産出できるのである。だから、廣域經濟の完成は決して量的資源の豊富なる獲得を以て終らない。いな、問題はそこから始まるのである。何事も量だけの發展で解決されない。量の大は、必ずそれだけの質の優秀を伴はねばならぬ。日本はいま外延的量の擴大を欲するが、それと共に或はそれにも増して質の強化も努めなければならぬのだ。

第二 日本産業の發展段階

日本は明治維新に資本主義を採用し、まづ商業資本の發達から振出し、今や重工業國化さんとしてゐる。その順序は左の如し。

第一期 商業資本時代。

(A) 内外の通商貿易及び貨幣制度の完備時代。

(B) 明治元年——明治三十年。日清戰爭によりて得たる臺灣と償金三億六千萬圓は實に金本位の確立と産業資本發展の基本となつたものである。

第二期 纖維工業資本時代。

(A) 紡績業と鐵道・電燈・電話の發達時代。(日清戰後)

第三期 造船業發達時代

(A) 日露戰爭によりて船舶の需要から造船の勃興を致し、後に來る機械工業の基礎を作る。

(B) 日露戰爭の外債七億八千萬圓、戦後の外債十億圓、ロシアからの賠償金七千萬圓は直接間接に日露戰爭の勝利に賭けて得られたものである。

これが滿鐵の獲得、朝鮮併合と相俟ち、日本産業をして重工業に赴く基盤を與へた。

第四期 電力發達時代

(A) 歐洲大戰による日本商品の世界的需要は、纖維工業に世界的基盤を與へ、同時に化學工業・

鐵工業生成の萌芽時代となつた。

(B) この間流入した正貨三十億圓は海外投資と海運・紡績・化學工業電力開發を最とし、重工業發達に備へられた。

第五期 重工業時代

滿洲事變と躍進日本により、ここに維新以來の資本主義經濟は、約六十年にしてその最後段階たる重工業に達した。之を逆に云へば、日本産業が重工業段階に達したから鐵と石炭のある滿洲がその發展契機となつたと考へられる。(拙著「海洋世界興亡史」参照)

第三 日本重工業の現地位

滿洲事變を契機として日本が重工業に躍進したのは(A)如上の産業發展的地盤のあつた事(B)濱口内閣の合理化運動により、日本製品の世界的割安とその躍進から、その身代りに滿洲開發と日本重工業再建に必要な資材を輸入した事である。

一 滿洲事變と日本産業の工業化

いかに滿洲事變以來、日本産業は高度化されたか。いま各産業の生産額を昭和六年と十三年を比較するに左の如し。(單位百萬圓。商工省及び農林省調)

	六年	十三年	増加率
山林	三四八	九三八	
水産	四〇〇	七一三	
農産	二、四八三	四、八七〇	二倍增
右小計	三、二三六	六、五二一	

	六年	十三年	増加率
鑛産	二四二	五八九(十一年分)	
工業	五、一七五	一九、六六七	
右小計	五、四一七	二〇、二五六	約四倍增
合計	八、六五三	二六、七七六	三倍增

上表の示すが如く、昭和六年このかた十三年までの間に農・水産額の増加率は三十二億圓から六十五億圓へ約二倍せるに對し、鑛・工業産額は五十四億圓から二百億圓へと増加してゐる。鑛産額は十二年以來その發表を中止されてゐるが、金・石油・石炭其他の十一年と十三年との増産額を計算に入れると鑛・工業額の増加は四倍と見て大過がない。

上表はむろん金額であるから、分量は必ずしもそれだけ殖えてはゐないが、昭和六年と十三年の物價昂騰率は平均的に見て農産品と工業品に大差がなく先づ二倍と見るべく、従つて分量的には農林・水産品には増産なく、鑛・工品で二倍の増産と見るべきであらう。即ち物價指數は昭和六年を一〇〇とせる三菱調査のものでは十三年平均二〇九を示し、商工省の工・鑛分量的生產指數は昭和六年九一のものが一七二を示し、ほぼ倍となつてゐるのである。

以て滿洲事變以來わが産業がいかに工業化したかが分るであらう。そして之はまた資本構成や従業員増加からも云へる。

二 輕工業から重工業へ

右は産業の工業化であるが、この工業が主としてどの方面で行はれたか。躍進日本は綿織物と人絹工業の躍進であるから、滿洲事變のあと暫くは輕工業の増進が目立つたが、やがて次第に金屬工業・機械器具工業・化學工業の飛躍となり、支那事變により劃期的發展を示すに至つた。左の如し。(單位百萬圓。商工省工場統計)

工業生産額内譯	明治四十二年		大正八年		昭和六年		昭和八年		昭和十三年	
紡績工業	三八八	三、二九五	一、八〇二	二、六九六	三、六五六					
食料品工業	一四七	七四〇	八三四	一、〇一七	一、七五二					
窯業	二五	一七五	一四二	二二二	四二〇					
化學工業	八六	七七六	八二五	一、三〇〇	三、六五七					
金屬工業	一七	三三八	四三四	八八七	四、四六三					
機械器具工業	四一	七一六	四四三	八〇五	三、五八八					
製材及木製品工業	一九	一五七	一四二	一八三	四四九					
印刷及製本業	一五	六六	一六七	一六九	二六四					
其他工業	三二	二〇一	一八七	二八二	六八九					

加工賃修理料	八	二〇一	一九三	三一七	七二三
合計	七八〇	六、六七一	五、一七四	七、八七一	一九、六六七

右表により明治四十二年の日露戦後の恐慌、大正八年第一次歐戦の大景氣時代、それから昭和六年の金解禁恐慌時代即ち滿洲事變から支那事變翌年までの我が工業界の趨勢を知ることができよう。滿洲事變時に僅々四億圓の産額であつた金屬工業は十三年に十一倍の四十四億圓に、機械器具は四億圓から九倍の三十五億圓に、化學工業は八億圓から四倍半の三十六億圓に突飛してゐる。之に對して紡織は十八億圓から三十六億圓に二倍せるに止り、且つ曾ての第一位から第三位に下りてその王座を金屬工業に譲り、第二位は化學工業に、そして機械器具工業と第三位を争つてゐる状態である。これも金額と分量とは必ずしも一致しない。殊に十三年頃の重工業は原料高と賃銀高が激しかつたから、金額で躍進するほどその生産分量は増加してゐないが、ともあれ其後も大飛躍せるは事業別拂込資本の現在別がこれを表はしてゐる。左の如し。(單位百萬圓。日本銀行調)

株式拂込資本事業別

	昭和十年	同十三年	同十四年
總額	一五、四八六	二一、〇七九	二四、九二八
電力	一、八八三	二、三三〇	三、〇二四
銀行	一、六七一	一、五一〇	一、五四三

鐵道	一、三〇四	一、四四〇	一、四七八
鑛業	一、〇八〇	一、八九七	二、一八九
織維業	九二一	一、二一七	一、一八三
化學工業	八八七	一、六三三	一、九七七
金屬屬	八七四	一、三二一	一、八七九
機械器具	五二八	一、四四一	二、一五六
其他産業	殘額		

右表により十年から十四年の正味三年の間に、わが産業界がいかにその資本構成において驚異的變化を遂げたかが分るであらう。

電力は發送電會社の設立その他で依然として第一位を保てるも、昭和十年に第二位なりし銀行は鑛業・機械器具・化學工業・金屬工業の進出により第五位に轉落した。

むろん如上の拂込資本額が必ずしも、その産業の使用資本力を正直に表示したとは云へぬ。銀行とか紡績はその基礎の鞏固なだけに積立金その他の蓄積金が、設備其他に變形して實際の仕事をしてゐる。これに對して新興産業は蓄積金がないから凡てを拂込に依存しなければならぬ。これが新興産業の拂込資本が巨大な所以でもある。

だが、これと共に資金調整法によりて株式の新設拂込が主としてこれ等の國防産業に許容率の多い

ことが他の主因であり、何れにしても大勢は支那事變を境としてわが工業の急激なる重工業化は否認すべくもない。

第四 日本の機械工業

一 英米獨との比較

日本の重工業殊に機械工業化は右のごとく躍進しつつあるも、これは主として日本内地用並びに滿洲國輸出のためであつて第三國に對しては輸出餘力のないばかりか、むしろ輸入してゐるのだ。

いま數字は少し古いが、世界の機械輸出額を見るに左の如し。(單位百萬マルク。「本邦財界情勢」十三年五月號)

世界の機械類輸出額	英國	米國	獨逸	世界(其他共)計
一九三三年	三七八 一五八	四二九 一七	七五一 三〇一	二、四七五 一〇〇〇
一九三四年	四一五 一六	四八二 一九	六四四 二五	二、五四六 一〇〇〇

一九三五年	四六九	六五九	六五二	二、七〇九
	一七	二四	二四	一〇〇〇
一九三六年*	六〇〇	八三一	八六四	三、一二〇
	一九	二六	二七	一〇〇
一九三七年*	七〇〇	一、一二〇	一、〇九〇	四、〇五六
	二二	二七	二七	一〇〇〇

註。機械類には電気機械器具を含む。但し英國に限り電気器具を除く。*推定額。

右表の語るごとく、世界の機械輸出は英米獨で、全輸出の七七%を占め、他は白・チエコ・伊・北歐・和蘭・佛その他である。

この中で英の輸出率が多いのは、その植民地向けの爲であつて、一九三三年以來の世界景氣殊に英植民地の農・鑛産物高による開發機械の購入増による。従つて第三國たるソ聯や日本への輸出は米國かドイツを主とするのみならず、その輸出金額に於て獨米が英を抜いてゐるのは前表が之を示してゐる。

また、一般の工業生産額は一九三五年に、獨が二百九十一億マルク、英も二百九十億マルク（十七億ポンド）米が八百十八億マルク（二百二十四億ドル）なりしものが、一九三八年には獨は三百八十三億マルク、英は三百十八億マルク、米が七百八十二億マルクとなり、この間に英は獨よりも二〇%減退し、米は然依として第一位なるもその産額は寧ろ低減して相對的には遠く獨の増進率に及ばない。

就中ドイツは此間その主力を國防から工業に注ぎ、この觀點からすると英米は一層ドイツに劣る。

二 ドイツの機械輸出入額

ドイツは右のごとく工業殊に機械工業國であつて、その生産額はもとより、貿易上の比率においても機械輸出は金輸出額の二〇%を占めてゐる。いま一九三八年ドイツ貿易の機械輸出額を見るに左の如し。（單位百萬マルク）

	輸 出	輸 入
總 額	五、二五七	五、四四九
食 料 品	六〇	二、一一一
原 料 品	五〇四	一、八四九
半 製 品	四〇三	一、〇四一
全 製 品	四、二八六	三九七
機 械	一、〇九八	五四

前表によればドイツ輸出貿易の八〇%は全製品であつて、原料輸出は石炭あるが爲にほかならぬ。そして製品中で、機械は二五%を占め、輸入では言ふに足りない。ここにドイツ貿易の強味のみなら

す、ドイツ国力の強味がある。一トン五圓の鐵鑛も之を伸べて針金とし、ゼンマイとし、或はミシンとなし、さらに精巧なる機械とせばその一トンが數萬圓から數十萬圓に價値化するのである。

三 日本の機械貿易

翻つて日本はどうであるか。いま昭和十二年の貿易を見るに左の如し。(十三年以後、機械輸入額發表中止。單位百萬圓。數字は「ダイヤモンド年鑑」及び「本邦財界情勢」十三年五月號。)

	輸出	比率	輸入	比率
總額	三、三九一		四、〇二六	
食料	二四八	七・九%	二五一	六・七%
原料	一三三	四・三	一、九九五	五二・八
半製品	八二〇	二六・〇	一、〇九五	二九・〇
全製品	一、九三五	六一・〇	四三五	一一・五
機械器具	二五五		二五〇	

日本の全製品輸出率は六〇%であつて、ドイツの八〇%に劣り、全製品中の機械輸出率はその一三%であつてドイツの二五%に劣るは致しかたなきも、ドイツの機械輸入がその輸出の五%なるに對し、

日本は一〇〇%である。換言すれば日本は機械器具を輸出してゐるだけ輸入してゐるのである。

吾々はよく貿易表で石炭の如きも輸出額だけ輸入されるのを見る。やや奇異の感なきにあらすが、それは輸送距離の關係と品質の優劣がある結果からくる。

同様の意味で日本は滿支に機械を輸出するが、他方また獨・米から機械を買ふ。それは日本の機械工業が一般的には完成せるも、未だ特殊高級品において完成してゐないからである。

機械を造る機械である工作機械や航空機や自動車用の内燃機關などになほ遜色がある爲であらう。昭和十三年後は不明であるが、次第に完成されつつあるは云ふまでもない。

四 質・量とも最高工業國へ

日本が大東亞の廣域經濟を樹立しようと思へば、その量と質と雙方において獨・米と伍して劣らざる高度工業國にならねばならぬ。然らずんば單に外延的・分量的に廣大なる經濟を保持し得ても、永へに自給自足の經濟完了體を實現できないであらう。われ一步を進むも獨・米にして同じく一步を進みつつあらば、歐・米經濟圏に追隨しなければならず、この經濟的・工業的・科學的追隨は同時に政治外交的或は軍事的追隨すらも餘儀なくせられる。揚句の果ては、ブロック内の國家群をして、その指導力に疑念を抱かしめる惧れすらもあるのだ。斯く觀じ來ると、科學の命懸けの振興と不斷の工業高度化こそ大經濟圏樹立の至上命令であらねばならぬ。

第十章 日本經濟の再組織

第一 再組織の要素

一 廣域經濟の成立條件

大東亞經濟圏の樹立には上來述べたやうに、まづ次の條件が必要である。

(A) 廣域經濟樹立の基體としての指導國の存在。

(B) 指導國は(イ)内には全經濟地域を承服せしめ、他のブロックには武装力で對抗しうるだけの強力國家でなければならぬ。(ロ)同時に高度工業國たるを要する。然らずんば高度國防國家たり得ないと共に、その經濟圏の資源を有効に利用して、その經濟圏を可能的自給自足の有機的一體たらしめる事ができないからである。

では、この目的を達するためにどうすべきであるか。云はずして明かである。國力の最も經濟的な

組立てにより、その得る餘剩力を上述の二目的に集中するほかはない。

二 國力組成要素の能率發揮策

國力を組成する要素は第六章に記した如く物的資源、貨幣資本及び人的能力であるが、之を經濟運營の主體から見ると次の三者である。

(A) 個人

(B) 企業

(C) 國家

經濟主體者 (A)の個人は主として消費の部面にあづかる行爲を表示したもので、よし個人の活動であつても生産部面にあづかる場合は(B)の企業に入る。謂ゆる企業家はもちろん、それに指導される技術家や労働者、さては資本家或は中・小企業の經營も凡てここに包含される。(C)の國家は曾て經濟の消費者に止まつたが、今や經濟活動の指導者として、時には生産者としてすら次第に大いなる役割をもつやうになつてきた。

客體の國土計畫 これは經濟で資本・勞力と相俟ち生産の三要素と云はれる自然——或は狹義の土地——を對象とするものである。經濟活動の主體ではなく客體であるが、一國の經濟力は要するに、この自然と經濟主體たる人との協力による能率發揮の巧拙で決まる。

自由主義の時代には經營や住居の自由が不可侵權の一つであつた。だから、よし科學的或は全體的には不合理・不經濟なことも、各人の勝手で土地を賣買し且つ自由に處分した。今やそれが全體的立場から許されなくなつた。ここに國土計畫が浮かび上つた原因がある。

かくて經濟再組織論は生産要素の合理化論とその組織の一體化論から成る。本章では(A)の個人生活の合理化並びにその組織について述べ、(C)(D)は次章にゆづりたい。

生活の原理 要するに能率生活の原理は次の如し。

(A) 創造的的人生觀に立ち、自分はいかなる場面を擔當せば國家建設に最も意義ある貢獻を爲し、併せて、自己のもつ天分を最も完全に生かすことができるか。この人生第一義をつかむ事。

(B) この指導理念の實現に不可缺の慾望を一意刺戟育成し、他の衝動や慾望は相手にせざるやう心懸ける事。即ち第一義生活と没交渉な社會生活や環境に立入らぬ事。

(C) 見えや形式・儀式生活は成るべく避けて、その間心身の安息と休養を圖ること。

(D) 食物は榮養本位に、着物は保存と活動本位に、簡單と質實を目標に。

(E) 娛樂も健康的な、時間も金もかからぬ手軽なもの。

(F) 生活は規律的に、用達は成るべく歩行で。朝は冷水摩擦、夜は入浴。

要するに Simple life, noble mind. 心は高く、生活は質實に。戦ひを創造のうちに、その苦難の克服のうちに、人生の意義と欣びを發見すべきである。ここに國家の發展あり、自己の完成あり、洒々

落々あわてず憂へず、その賦命を楽しんで果たし進むべきのみ。

第二 生活の原理

一 能率發揮の基本則

個人の能率發揮の消極的條件は、謂ゆる贅澤を廢する事であり、積極的條件はその性格に最も適した職場で仕事のうちに全力を打込み、そのうち込みによりて己れを磨き上げると共に、磨き上げた己れを以て更に仕事に打込む、この繰返しの展開を楽しむ所にある。俗に仕事道樂と云はれるのがこれである。

明治天皇御製

照るにつけくもるにつけて思ふかな

わが民草のうへはいかにと

畏くも 明治天皇は照るにつけ曇るにつけ朝な夕な、國民はどうしてゐるか、この天候は國民にどんな影響を及ぼすかと、四六時中、絶えず政治のことばかりお考へになつてをられたのである。

もし日本國民の凡てが 明治天皇と同じとまでは行かないでも、せめてそれに近い、職分に對する

熱心さと趣味があれば、どんなにその職場の能率が上がる事であらう。あらゆる大事業はみなかやうな仕事道楽に淵源する。エヂソンの大發明もヒトラーの電撃戦も、彼等は寝ても醒めてもその一事を樂しみ我を忘れて打込んでゐる結果にほかならない。

だから、一國がその國力を發揮する基礎條件は、各人がその適所で力を集中して適才を發揮することである。之を裏から云ふと、身に合はぬ餘計な事はなるべくしない事である。ここで贅澤とは何ぞや、一應再吟味の要がある。

二 贅澤論

自由主義時代の贅澤 一般に贅澤を以て物質的に解してゐる。それは誤りでないが、もし之を廣義に解すれば、餘計なことは何でも贅澤なのである。役にも立たぬことをやつて肉體のカロリーを徒費し、體力を消耗する行爲も贅澤と云はねばならぬ。

自由主義・個人主義の立場で贅澤とは身分不相應の行爲と定義される。狹義には分限を超えた金や物の使ひかたである。この定義によると、何が身分不相應であるかを決めなければならぬが、それは第三者はもちろん、本人すらも一定した限界が分らない。第三者から見てもあいつ貧乏の癖にと思つても、本人は案外金持ちかも知れぬ。従つてこの定義から或る事が贅澤か否かを決める唯一の標準は返濟のあてもなき借金をしてまで虚榮を張ることである。

よし、借金して虚榮を張つても、その借金を返濟する力があり、或ひはその虚榮を一つの資本視する贅澤は、それが營利の元手となるのだから贅澤ではない。或は美飾が良縁のもとになれば、妙齡女の華美も實は贅澤と目されない。それは一つの資本である。

故に自由主義の社會では結果から見ても、それが全く贅澤倒れに終つた時のみ贅澤と云へよう。

全體主義時代の贅澤 全體主義の立場では贅澤の意義も比較的分明である。曰く、國家發展のためにその職分を完全に果たす必要行爲・必要手段のみが許容さるべき正常行爲であつて、この正常的分度を超えたものや、外^はづれたものは贅澤である。

だから、少なきガソリンは國家發展の活動に最も緊要なる總理大臣がまづ之を消費する。餘りがあれば次に各大臣の國家的活動の場面に廻はすなど、消費の重點主義・能率主義をとるわけである。

贅澤のかやうな標準は、従つてその行爲が國家發展にいかなる程度で貢獻するかによるから、別の意味で無能な總理大臣に提供したガソリンは、ガソリン自身の消費は形式的にいつて贅澤ではないが、そんな無能な總理大臣を戴いてその無能を傍觀してゐた事が一つの大きな贅澤となる。

物でも時間でも人間でも、すべて國家の發展強化のため最有効に使用さるべく、然らざる使用・消費はすべて贅澤である。

そこで又いかに安くても能率のないもの、直ちに使用に堪へざる物の消費も、或る意味で贅澤であつて、高くてもそれ相應の價值と能率があれば反つて經濟的とも云へるのだ。高價が必ずしも贅澤で

はない。安からう悪からうも一つの贅澤である。人的資源についても、工業的設備や國防にしても同じことが妥當する。

第三 簡單生活論

一 精神的贅澤

贅澤を上のように説くと更に進んで吾々は心の贅澤を捨てなければならぬ。心の贅澤とは何か。努めて無用の煩惱、衝動或は慾望を整理して、それを一つの理想實現、職分本位にまとめあげ、それと關聯なきさまさまの煩惱は抑壓排除すべきことである。

哲人カントの如きはこの模範であつて、彼はその心身のあらゆるエネルギーと時間を唯一の慾望即ち眞理の發見に集中した。その爲に彼は弱體で以て千古を貫く眞理と等身を超ゆる大著とを残したがそれは彼の簡單極まる生活に由來してゐる。衣食住はむろん、生活のどの方面でもその最大最高の唯一目的の實現を樞軸として設計された。

これは獨りカントだけでない。エヂソンやヒトラーも凡そ偉大なる事業をした人の生活原理なのである。その根因は實に彼等が慾望の基盤たる衝動——衝動とは心中から先天的に湧起する生の力であ

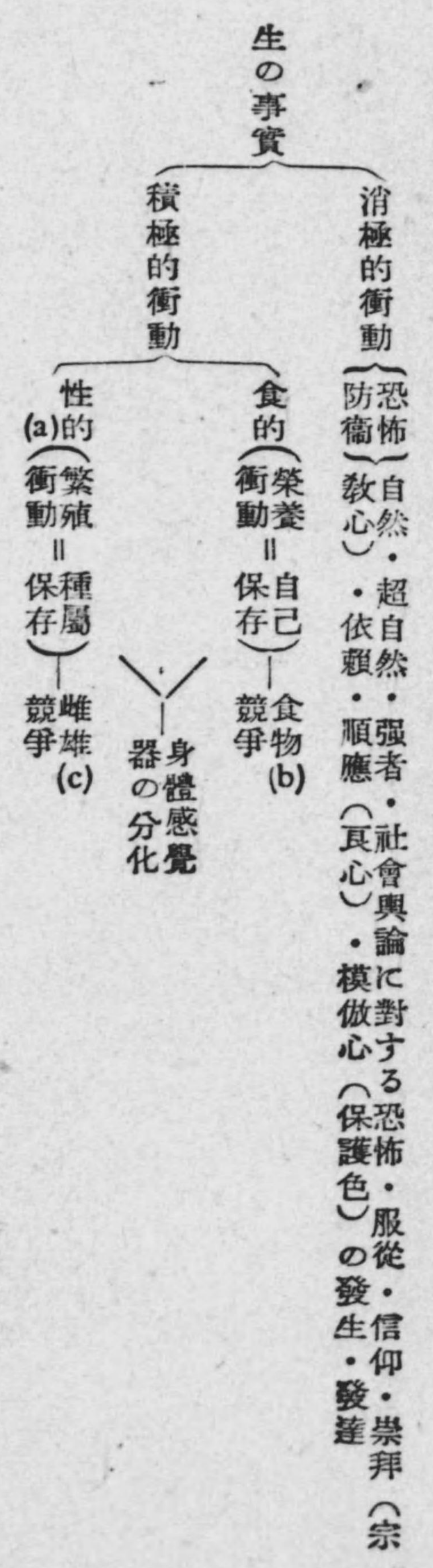
つて、この衝動が外界のものとおつつかると多くの慾望となる。例へば飲みたい渴は衝動である。之が外界の物に會つて或は水或は酒或はサイダー或はコーヒー等を願望する。これを慾望といふ——の數數を清算し、この短き人生において、いかなる衝動、いかなる慾望の充實・實現に集中することが自分の使命であるか。これを吟味・検討して一度びその使命を發見するや、他の衝動を惜しげもなく捨てて顧みず、その唯一の使命實現に脇目もふらず邁進するのである。その使命の達成のうちに自己を磨きあげ、その使命の實現過程に生の躍動と喜びを感じるのである。

この心中の賊を退治ることはなかなか容易でない。多くの人はあれもして見たい、これも嗜つて見たいと道草に囚はれ、その中に人生を終へるのである。従つて簡單の反對に非常に煩雜な生活となる。いかに人間に衝動の多きか。筆者は曾て拙著「生の經濟哲學」において、假に並べたものでも次の數だけある。衝動の數も強弱も、人により時代により異なるが、これはまづ基本的なものと云へよう。

二 衝動の種類

衝動は生きる事實に基き、生きるに都合よく發達したものであつて、之に反して偶々生きるに不都合な衝動が生じてもかかる衝動によりて行動する生物は、事毎に環境や同類と衝突して生きるに必要な勢力を徒費するから、生存を全うせずして死滅する。だから、そんな衝動は遺傳するだけの根據がなす。

さて然らば衝動の種類は如何。筆者は次のやうに分類するものである。



- (a) 性的衝動
 - …… (快) — 戀愛 (性異)
 - 生殖 (殖) — 慈愛 (愛子)
 - 夫婦愛 (家族生活) (d) 活
- (b) 食物競爭 (相互扶助) || 團體生活 (e) 活

體力、智力の發達 (對敵及び客觀物對象の正しき認識力) 好奇心 (學的發達) 勇氣意志の發達 (i) 闘争 | 競爭 | 勝利 (k) 對物並に對人的支配獨占 (f) 所有蓄積衝動 (j) — 自由に對する衝動發生 (i)

- (c) 雌雄競爭 (異性吸引) — 裝飾 | 求美衝動
- 被認識衝動 (g) (虛榮、名譽の憧憬)

- (d) 家族生活 群居社交衝動
- (e) 團體生活 道德發生 (同情、報恩、犧牲) 良心の發達 (消極衝動) 正義、義務心 (h) (良心の發達) (との化合)
- (f) 支配衝動
- (g) 被認識衝動 權力渴望衝動 (空威張りは實力なき (f) (g) の化合)
- (h) 義務衝動 實權力渴望は (h) (m) を主要素とす
- (i) 自由衝動
- (m) 活動衝動
- (j) 所有蓄積 營利衝動
- (k) 闘争衝動 (子供の喧嘩及びスポーツは平和單調生活に於ける闘争性の一表現手段)
- 生の事實 — 生命衝動 (生きんとする意志の發達)
- 榮養過剩 — 活動衝動 (m) (遊戯) 努力衝動

三 衝動の起因とその説明

右は筆者が試みに「生」の事實から演繹して思案したものであるが尙ほ修正さるべき多くの點を持つであらう。衝動の分類については筆者の見解と稍々異つてゐるがオッペンハイマーが委細を竭くしてゐる。さて今前掲表に對する筆者の考へを略説して置かう。

生といふ事實から出發して先づ認めなければならぬのは、食に對する衝動であつて次ぎは繁殖に對する衝動である。食若くは繁殖の衝動を充たす必要手段として、ここに身體における五感並びに他の器官の分化發達を來たすが、これらの器官は永く使用することに依りてその部分の神経系統の發達を來たし、感覺的快感を食らんとする新なる衝動が發生する。味覺その他のものが是である。尙ほ器官の分化に就てはヴントが委細を竭くしてゐる。

さて原始的の求食衝動や繁殖衝動は必らずしも快樂を豫想しない。舌に於ける味覺の發達も、生物は味覺の快感を味はんが爲に食するにあらず、實は常に食して同一部分の神経を刺戟するから味覺が發達したのである。同じく性衝動にしても初めは個體の榮養佳良や精力過剩の結果、その過剩勢力を個體細胞が包容し切れず、勢ひ分裂若くは排除せんとする衝動に過ぎなかつたものが、高等動物となるほど次第に觸覺的快感を増加して……衝動が發現するのである。

種の保存は生物界の事實であるが、それが特に繁殖衝動として意識せられるのは恐らく人類だけであつて、種の繁殖衝動が男子よりも婦人に強く、殊に家族制度の社會に強いのは子孫の繁殖がその老後の生活に便宜なことにも因るであらう。

……慾や繁殖衝動や子に對する愛などが合すると戀愛・夫婦愛の發生となり、家族生活の基礎を作る。而して家族生活はこの基礎の上に生活的保障を得て強固になるが、かく強固にされたる家族生活こそ道德發生の大いなる役割りを勤め報恩的な獻身犠牲の衝動を生む。

生の事實は又その消極的方面にありて生の恐怖及び防衛衝動を生む。何となれば生物にして若しこの衝動が鈍感ならば、いかに積極的衝動が強くとも、その生を全うする事が出来ないからである。即ち自然並びに強者・英雄の脅威に對する反應作用であつて、社會生活に於ては社會輿論に對する恐怖と順應性である。その順應作用として、宗教的信仰や強者崇拜や・依他性・服従・生物の保護色・模倣衝動などが發達するのであつて、偽態の發生は實に生物の發生と共に古きを知る事ができる。

求食衝動は常例として異種生物間の食物生存競争を起し、性的雌雄競争は云ふ迄もなく同種内の異性選擇若くは異性奪取・獨占競争を起すが、これ等の競争のためには智力と勇氣とを必要とするから智力と勇氣ある種屬を勝者として殘存繁榮せしめる事になる。

智力は自己の強敵若くは獲物たるべき客觀對象に直面して、自己の直觀と對象とが正しく合致するや否やの直觀力や認識力と、これを捕捉獲得する手段的策略智謀から成り、その一つを缺くも最後の勝利者たり得ないのである。

同時に智力の指示する所を信じて疑はず、敢て突撃する勇氣と、すばやく遁走して敵の追撃から身を隠すの果斷性など、凡そ生存競争に於いて意志の強弱が智力と劣らぬほどの重要なる役割を演じるのも云ふまでもない。

勇氣は鬪争や競争衝動に次いで、勝たんとする衝動や支配所有衝動を發生するが、支配衝動は物的と人的の支配衝動に分化し、遂にその獨占所有衝動にまで發展しなければ已まぬ。而してこの衝動系

列は自由を求める衝動となりて、その極致に達するのである。

食物競争は前述の如く原則として異種属間に行はれるから、弱き種属は共同して以て強敵に當たらねばならぬが、肉食動物は強きが故に單身孤行して敵を襲撃し、草食動物は弱きが故にその防衛のために群居するを常態とする。この點はクロボトキンが「相互扶助論」において、幾多の例證を擧げて説ける所である。進んで考へるに肉食動物の餌食たる當の相手は、動的のものであるから之を追走するには體力の相違その他の關係から共同運動が困難である。之に反して草食動物はその食物が同一地帯に群生繁茂する植物であるから、肉食獸は自然に孤獨的となり草食動物は自然に群居的とならざるを得ない。人類にありても狩獵民として育つた歐米人が個人主義であり、東洋的農耕民が家族主義的たるのも同一原因に基いてゐるのであらう。

群居生活・共同生活の結果は、團體道德殊に分業・責任・正義心の發達を來たして義務衝動を發生する。かかる共同社會は血族を基礎とする家族團體と異なり、生活といふ利害を目的とする利益團體であるから、血族團體が愛の衝動を強めるに對して利益團體は義務衝動を強める。個人主義的な北歐人種系統の文明には愛の宗教が發生せずして、正義の徳が讃へられてゐたのも、この視角からも解釋できるであらう。ただ具體的に見ると、原始社會は同族的協同體と利益團體との未分化の状態にあるから、愛的衝動と義務衝動との兩者の萌芽を含んでゐる。廣義の道德的・良心的衝動の發生は、性的衝動に淵源した家族生活と食物競争に淵源した群居生活とが、生の消極的衝動たる恐怖心と化合して

發生したものと云へよう。

雌雄競争は同種間に行はれるからして、その勝者たるには他の同類よりも何か目立つた事によりて異性を吸引しなければならぬ。ここに美聲・美色・媚態、約言すれば一切美の發生原因が伏在し昂じて藝術の創造となる。動物にありて雄が美にして雌が然らざるは、雌の數が少なくして雄の數が多く、雌雄競争において娘一人に對して婿八人も競争相手があり、目立つた風姿を以て雌を引付けねばならぬからであるが、何故に動物では雌が少なくして雄が多いのか。恐らく動物は食物競争に際して、雌も雄の保護を受けず自立して競争せざるべからざるに拘はらず、雌は體力において或ひは妊娠・育兒などにおいて、攻防ともに不利なる條件にあり、勢ひ雌は他動物から喰殺されたり餓死する機會が雄より多くして自然にその數が減少する爲であらう。とにかく數の少ない事は女性の少なき植民地國アメリカにありて女權發達を來たしたやうに、動物に於ても女性尊重を招き、結果は女性の淘汰が鈍ぶり、その進化が阻止された形勢を呈してゐる状態だ。

雌雄競争は美の起原たると同時に他者から自己の存在を認めて貰ひたい衝動を生む。具體的に云へばそれは虚榮並びに名聞を求める衝動であり被認識衝動である。虚榮と名聞衝動との區別は、虚榮が社會的功業を爲さずして個人若くは社會から認識されんとするに對し、名聞衝動は功業によりて認識されんとするにある。従つて發生的には虚榮が先づ發芽し、名聲慾は社會生活が高度に達せる人間にのみ生ずるわけであるが、現實にはこの區別も必らずしも分明でない。

權力衝動は支配衝動と被認識衝動との複合性を帯びるも、發達せる人にとりては單に此等の衝動を以て満足せず、その權力によりて何事かの功業を社會に爲さんとする活動衝動及び義務衝動が強まり、之を果たさせん爲に權力を渴望するに至る。従つて權力衝動の内容は人によりて或は下劣の分子が多く、或は高貴の分子が多い。

支配衝動は食物競争・雌雄競争と相合して、ここにそれ等の衝動を満たすに必要な手段の所有蓄積衝動となり、進んで獨占的獲得となる。この所有蓄積若くは獨占衝動は貨幣經濟の出現とともに營利衝動を生むのである。

營利衝動の存在は、シュモローが一衝動として掲ぐる位であつて、今や何人も之を否認しえないであらう。その發達の基礎は(a)一定の技術的・社會的前提(b)一定の道德的慣習及び法律規定(c)人間來の諸種衝動及び快感である、換言すれば自己保存と活動の衝動並びに個人的利己主義が或る經濟段階に於て肉體的欲望・將來に對する計量心・自制及び知的努力と結合して發達したものである。シュモローの營利衝動論はその分析が微細であるが、この分析は實に營利衝動のみならず、權力衝動や其他の衝動にも妥當し、必らずしも營利衝動の特質を挙げたものとは云へぬ。

營利衝動の特質は貨幣の所有蓄積を以て竭き、それ以外に求むる必要はない。ゾンバントが其の著「經濟生活の秩序」で營利主義を資本主義の指導經濟主義となし、前資本主義時代が單に需要満足なるに對し營利主義は飽くなき貨幣集積にありとせるものは是である。

前資本主義時代に於ても金銀の流通せるかぎり營利心は存在したが、金銀存在量の稀少や預金制度の不完全のために、それが萬人に普遍化し衝動化するには至らなかつた。物財の所有獨占慾は存したが物財は貨幣のごとく蓄積が容易ならず、土地も亦分量に限りがあり且つその利用には多數の奴隸・半奴隸を必要として、勢ひ土地を持つよりも權力を持つものが眞に土地の收穫を自己の物になし得たから營利衝動の發生餘地が尠なかつた。これゾンバントと共に營利衝動と資本主義との兩者に關聯を認める所以であつて同時に營利衝動の發生が他の衝動よりも稚^よき所以でなければならぬ。

如上の諸衝動はそれが複合的のものであつても一部のものであるが、これ等の基礎には生命衝動と活動衝動及び鬭爭衝動とがある。

生命衝動即ち生に執着して死を避けんとするのは動物の本能とも見られるが、かかる一般的の本能若くは衝動が、凡ての動物にありや否やは實に疑問である。生きてをればとて、また強敵に出會つて直ちに遁走すればとて、彼等に生命衝動がありとは必ずしも斷言できない。下等動物には寧ろ個々の食性的・性的その他の感覺的衝動があり、この爲に生命の攻防手段に出づるも、それは全生命の保全衝動といふよりは寧ろ局部的・感覺的衝動の結果にほかならない。例へば昆蟲は之を突くと擬死するから之を人間的に類推すると如何にも生命衝動から發した防衛手段のやうに見えるが、その實これは昆蟲の觸覺が突撃を受けて麻痺し、收縮した結果であつて恰も泰然として腰を抜かした形である。

動物が生命慾を持つのは、どの發達程度からであるか容易に認知しえないであらうが、生命衝動は

他の生物よりも人間に最も強く、人間にありても優勝人は劣弱人よりも一層強いことだけは確である。何となれば優勝人はその生活内容が豊富——主観的には慾が多く且強大——であるから容易に死にたくなると同時に、之を結果から見ると優勝人はこの世の生存適者であり勝利者であるから、遺傳的に種々の生存苦惱を克服する才能を多分に持つてをり、闘争力も生物中で最強盛である。故にまた生に對する執着も最強盛と推定されるからである。

右のやうなわけで、生命衝動こそ論理的には各衝動の前提たるべく見ゆるも、歴史的には反つて遅れて後に發生したものである。にも拘はらず、この生命衝動は今や人の諸衝動に入込み織込まれて他のもろもろの衝動を動かす力源となつてゐる事は看過できぬ。

生命衝動に次いで人間には活動衝動があり、シヌモーターも亦この衝動の重大なる役割を認めてゐる。この衝動が榮養の潤澤と精力の過剰から來ることは性慾と似てゐるが、常則としては性慾衝動を充たさない爲か若くは充たして且つ精力の過剰なる場合に起るものである。飼犬の遊戯や、原始人のダンスは活動衝動の現はれと見られる。プニヒアーは遊戯は經濟に先立つと言つてゐるが、人類活動従つて又衝動の多くはその底に活動衝動を伴なつてゐる事によりて一層その目的を完成する。殊に生活と直接に關係なき眞善美への活動及び創造的の發見・發明行爲には多くこの活動衝動が結合してゐる。

なほ活動衝動と相似た働きをなすものに、闘争衝動がある。生物として種々の闘争を重ね、ここに

人類となつたのであるから、それが人間に衝動化してゐるのは當然である。スポーツ其他の勝負事は平和時に於て此の衝動を満足せしむる一手段でもある。従つて人生そのもの大闘争と取組める人にはスポーツ等に大して興味は出ない。生そのものに依つて闘争衝動を充足してゐるからである。何れにしてもこの衝動は今尚ほ人生活動に於て可なり大きな役目を演じてゐるのである。

右は普遍的衝動の大綱に過ぎず、衝動と欲望その他との關係は必ずしも分明なものではなく、欲望も絶えず充足される事によりて衝動化するものであつて、飲酒・喫煙なども甲には何等欲望化もしないが、乙には既に欲望化し、丙には全く堪へがたき衝動に化してゐるのである。聽てそれが普遍化することもあるが、時代的・社會的・個性的に見るならば一方で衝動と認められるものも他方で必ずしも衝動と斷言する事ができなう。

第四 消費合理化の社會組織

衝動の種類は斯くも多く、兼好法師の云へるが如くまことに愛著の道その根深く源遠きものがある。そこで利潤追求慾や贅澤衝動なども容易に抑壓しにくい。しにくいを以て深きに代へるは必ずしも難でない。その轉換方法については次章で説き、ここでは消費の合理化に就いて述べるであらう。

一 消費の生産化・能率化

従來の消費は、消費のための消費であつた。時間と金が餘つたときに、その使ひ場所を塞ぐための消費であつた。だから、全體主義的立場から見ると、すべて贅澤だつたのである。有閑にして爲すこともなき封建時代の消費が、そのまま繼續されたのである。故に、多くの經濟書では消費論を説かな

これに對して若しカントやエヂソンや或はわが貝原益軒や其他の偉大者のごとく、その食事も旨いことよりも榮養第一とし、その散歩も面白いよりも健康第一とし、すべてが彼等の認めて以て人生の第一義目的・理想の實現と有機的全體のつながりをもつ消費であれば、それは生産的消費であり能率的消費であつて、科學と經濟學の大いなる研究對象である。

吾々はかやうな消費を爲すためにも次の二つの條件を必要とする。

主觀的條件 吾々の消費も、その物資の生産は國力の具現したものであるから、その消費もまた衝動のままに、個人の恣意的自由によりて消費すべきでない。自己の消費を通じて、自己の健康的發展と能率増進を圖り、以てその職分を完全に果たして國家の強化に貢獻しなければならぬ。換言すれば、その職分奉公を指導精神として、その凡百の衝動と消費を規正しなければならぬ。これは今後

客觀的條件 消費の目的が生産的に一轉した結果は、その消費手段について、最小の費用で最大の効果あるものを選ばねばならぬ。それには科學的知識が必要となる。個人主義・自由主義時代には自分の思ひつきで旨いと思ふもの、美はしいと思ふものを勝手に買つて任意に消費すれば足りたが、今ではそんな偶然的恣意的自由は許されない。

同じ食物にしても何が榮養があるか何が僅かの手數をかけて最大効率ある食物であるか、生産者も消費者も消費物に對する科學的知識・經濟的觀念を要請されるのだ。衣服についても亦然りである。消費者が眞に消費經濟の知識を以て店頭に立つならば、何らの榮養もなき或はもつと安い價格でより多くの榮養が取れるのに、わざわざ血にも肉にもならぬ高價なフルーツとか、異様な婦人帽や或は歩きにくいハイヒールや非活動的なきもの、その他の謂ゆる贅澤品と呼ばれる一切のものが、その姿を街から消すであらう。即ち期せずして世界が簡單且つ健康的になるのである。

二 隣組制度の確立

右は個人的心構へであるが、いかに個人的心構へが改善されても、それが社會機構として保障されなければならぬ。それには

(A) 法制による罰則。例へば未成年者の禁酒・禁烟のときも必要であり且つその容赦なきれ嚴罰も要請せられる。だが、同時にこれ等の最後の拘束力は

(B) 社會機構としての隣組制度の確立である。この點については既に社會的輿論となつてゐるから問題はその具體策如何である。

社會構成の細胞單位として、市街地と村落とは事情を異にし、市街地も大都會と小都會で異なるから之を一概に規律せず、十戸廿戸を單位として向ふ隣りを中心に構成さるべきであらう。

その組長を選擧とすべきか任命とすべきかは後に企業組合の章で述べるが如く一つの問題である。何れが果して日本的であるか考究を要する。

何れにしても町會又は部落とその下の隣組は社會の基底構造を爲すものであつて、その細胞分子の善惡・健否こそ日本の運命を決するものであるから、この點、日本國民性の現實と日本の理想とを巧みにもり込んだ組織としなければならぬ。

(C) 町會隣組を基礎とする衣食其他生計品の切符制擴大。蓋しこれに由つて全社會の消費は公正且つ合理的となるからである。なほ町會は切符交附手数料として所得税に應じ一定額を徴收し、之を町會費及び國稅の一部に繰込み、本書末章に述べる如く物價調節にも資すべきである。

三 慰樂の健康化

個人の欲望をかく合理化し、また或る意味で之を抑壓し狭小隘化する結果は、その彈壓されたもろもろの欲望はどこかで反逆を企てる。だからその排除口を設ける必要がある。聖人ならば賢を賢とし

て色に代へる事もできようが、之を一般の人間に求めることはできない。ただ、成るべく健康的な有益な慰樂をもつて之に代へるべきだ。

由來わが國の代用品は餘り成功してゐない。これに反して、ドイツの代用品はその多くが成功してゐる。慰樂の代用品だけは是非とも地についた而も理想性を失はない何かを創案しなければ、その反動また恐るべきものがあらう。

その一例として(A)家庭生活の内容を豊富にする事であつて、これには主婦の生活學研究を前提とする。(B)家屋そのものの構造についても、新生活に適應する快適と能率化につき一工夫なければならぬ。

四 適性検査

仕事道樂の根本條件は、各人がその性格・趣味とその職分とが合致することである。

政治家も實業家も技術家も學者も將また労働者も、その性能と合致した職業・職場についた人が人生で最も幸福であり、最も能率的なるは云ふまでもない。

もしその社會的機能とその擔當者の性能とが合致せば、他に利潤その他の刺戟がなくても、その仕事自身を楽しみ、その仕事に銳意没頭し、仕事を創造する創造的人生觀を以て欣々然としてその職域を通して社會・國家のために最大の能率が發揮できよう。

故に政府は國民學校——小學校——の生徒に對し、教師並びに専門家をして常に生徒の性能検査をなし、その就職に際し善き示唆を與へる準備をしておかねばならぬ。

この結果は職業紹介所においても、要人者・就職者ともに頗る便益が得られ、常に本人一生の幸ひに止まらず、實に國力の發揮に大なる影響を及ぼす。即ち前に筆者が擧げた人的資源の無駄使ひ、贅澤中の贅澤がこれで揚棄できるのである。

第十一章 日本企業再組織論

第一 企業目的の變化

企業とは營利又は生産のためにする事業經營である。企業はその營利性又は生産性を實現しようとして、生産の要素たる土地資本及び勞力をできるだけ合理的に組合はさうとする。この點で企業の性質はその目的如何に拘らず同一であるが、いまや企業の目的が變はつた爲に、企業が全體として再編成を行はねばならぬやうになつた。

目的の變化とは云ふまでもなく、從來の營利中心の企業から生産中心の企業となり、その生産も單なる一階級——資本家又は勞働者——の需要に應ずる階級的生産でもなければ、國民全體の生活安定を主眼とする厚生經濟でもない。これ等を超越した國家自身の理想的な生存發展——即ち大勢力圏の建設とこの建設に對應する積極的國防國家・強力國家・武装國家の體制の築き上げ——に必要な生産力を増大する役割を持つてきたことである。

一 公益優先主義

如上の目的を達するためには、従來の價格變動或は價格操作を利用してその間に最大利潤を得ようとする利潤追求經濟を揚棄しなければならぬ。マルクスの謂ゆる貨幣(M)——財貨(W)——より大なる貨幣(M')の生産行程から企業を解放して、國家の緊要品をその緊要程度に應じ、必要量だけ生産する機構としなければならない。

二 個人主義企業の利害

企業の自由主義・個人主義は、企業に、創意的刺戟を與へ、資源が豊富であり、その開發に忙しい(A)資本主義の發展期(B)現在でも資源の多き米國(C)或は資源の有無や資本や勞力を自由に交換・移轉しうる自由通商時代には、一國並びに世界經濟の發展に多大の貢獻を果たす。

だが、これ等の條件がすべて閉鎖された所では企業の個人主義は許されない。

自由競争のエネルギーの濫費 自由競争による富の濫費・生産力の浪費がある。卑近な例だが、個人企業が濫立せる結果はその廣告や宣傳のためだけでも可なりの物資が消耗される。新聞に支拂はれる廣告料だけでも紙とインキと人的勞力及び機械の摩損を意味するのだ。或は配給組織を合理化して單一組合とせば、現在の勞力はどれだけ緩和されるか知れない。

何れにしても自由競争は濫費を意味し、自然界でも下等生物ほど濫費してゐる。例へば高等動物よりも下等動物、下等動物よりも植物は、非常に澤山の種子と子供を生むが、その濫費と不經濟は甚しい。極端なる自由競争により適者・優者を淘汰し、一個の人間を作り上げるまでに、どれだけの犠牲を過去の生物史で拂つてゐるか分らない。社會もまた低社會ほど自由競争が甚しく、國力が濫費されてゐる。これけ社會が組織化されてゐないからであつて、恰も醉生夢死の個人がその生活に指導精神の行動の組織化がない爲に、恣意的衝動を追うて生命力を濫費してゐるのと同じである。

歴史は今や社會國家機構の高度化を要請し、自由競争による濫費がなくても、それ以上の創意と發展を期待してゐるのである。

營利經濟と不生産性 利潤の大が必ずしも生産性と合致せざるは云ふまでもない。日本内地で米が一年に七千萬石必要とする場合に、七千萬石の生産があれば米一石(一四〇疋)三十圓に低下し、生産量が六千萬石の場合は却つて一石四十圓に暴騰する。これは必需品ほどその必要量に足りない時に暴騰率が大なのである。營利經濟の立場から見ると、生産者は生産の少い六千萬石でも一石四十圓で賣れると合計二十四億圓であり、七千萬石でも一石三十圓では合計二十一億圓であるから寧ろ生産減若くは飢饉を喜ぶことすらある。

だが、これは厚生經濟の立場からも國家發展の立場からも許されない。ここに營利經濟と厚生經濟、殊に國家的全體主義經濟との矛盾がある。

贅澤品の生産もまた然りであつて、之がために国力は少しも増進せず、徒らに勞力や資材を一個人の自由な恣意的欲望と他の個人の營利衝動を満足せしめるに過ぎない。

營利經濟と生産經濟には右のやうな矛盾があるから、生産力増大を第一義とする全體主義經濟では、どうしても公益優先性を強調しなければならぬ。經濟倫理の聲が聞かれるのも主因はここに存しなければならぬ。

個人主義經濟の無政府性 自由主義・個人主義的企業は、價格を唯一の基準として生産するのであるから、利潤の多き高價のものが常に生産せられる。結果はその高價品の供給増加となりて價格が低落し、ここに各種産業を通じて利潤は平均する傾向がある。利潤の平均化は社會の需給がまた均衡を得た證據ではあるが、その均衡を得るまで利潤多き物に生産が集中されて往々生産過剰となり、揚句の果ては恐慌を招來する。これは自由主義經濟が個人の思惑によりて生産せられ、そこに全體を通じての綜合計畫がないからである。

最近、贅澤品が昭和十五年七月七日の禁止令により、その生産者は製品のストックに困つてゐて、織物で三億圓その他で二億圓合計約五億圓見當の損失を被つたと傳へられる。だが、自由主義經濟の恐慌時には、それ位の損失はザラにある事で、歐洲戦後或は金解禁時の値下がり損は五億圓どころではない。

或は國家的に見て、個人的の損得よりも、その物資がストックとしてそのまま使用されぬことは惜

いといふ。だが、之もその製品が日常用のものでないならば、今後の社會生活でそんな物の使用は當分不用となるのであるから、積極的の損ではない。これを勿體ないと云つて使用するのは腐敗物を喰べるのと同じで、結果は一層の損失を招くのだ。自由競争時代には社會進歩のために、絶えずどこかで何人かが一層大きな損と社會的無駄をやつてゐた事を忘れた論にほかならぬ。

何れにしても自由主義經濟はその無政府的性質のために、無駄が多いのみならず、國家發展に必要なとする生産性とは合致しないのである。或は過去の自由主義經濟時代には國內にも開發さるべき資源が多く、世界も、平和的自由通商時代であつたから、アダム・スミスの説くがごとく個人の營利經濟が同時に社會の厚生・國富の増進と合致した。それが舞臺の變はつた今では必ずしも合致しない所に營利經濟を止揚した生産本位の企業編成が行はなければならぬ。

第二 産業再編成

一 ドイツの産業團體

ドイツの産業別構成は一九三五年左のやうに編成替へされた。(小穴毅氏「獨逸國防經濟論」一七三頁)

ドイツ國體編成圖と機構の全貌

(1) 工業全國團

第一主要團

A 經濟團 鑛業

分團——(一) 石炭鑛業、(二) 褐炭鑛業、(三) 鐵鑛業、(四) 金屬鑛業、(五) 加里鑛業、(六) 岩鹽及鹽田業、(七) 石油採掘業、(八) 雜鑛業

B 經濟團 製鐵業

分團——(一) 製鐵及製鋼業、(二) 上質鋼業、(三) トーマス鍊滓

C 經濟團 非鐵金屬工業

分團——(一) 金屬半製品工業、(二) 金屬製造業、(三) 金屬鑛業

D 經濟團 鑄造業

分團——(一) 鑄鐵業、(二) 鋼型鑄造業、(三) テンペラ鑄造業、(四) 金屬鑄造業

第二主要團

A 經濟團 鋼及鐵製造業

分團——(一) 鋼具製造業、(二) ボイラー、タンク、導管裝置製作業、(三) 鐵道車輛製作業、(四) 野外軌道及工場軌道材料、(五) 造船、(六) 集中煖房及換氣裝置製作

B 經濟團 機械製作

分團——(一) 工作機械、(二) 製材機械、(三) 機械工具及精密工具、(四) 纖維工業機械、(五) 被服工業機械、(六) 農業機械、(七) 原動機、(八) 壓縮空氣工業、(九) 唧筒工業、(一〇) 鐵工、金屬壓延、鑄物機械、(一一) 選鑛及採鑛機械、(一二) 起重機、捲上機及昇降機、(一三) 製紙及印刷機械、(一四) 食料嗜好品工業用機械、(一五) 器械裝置製作、(一六) 事務用機械、(一七) 經濟必需品裝置、(一八) 武器裝備、(一九) 聯動裝置、(二〇) 其他

C 經濟團 車輛製造業

分團——(一) 自動車及發動機、(二) 自動自轉車及發動機、(三) 自動車組立及附隨車、(四) 自轉車及乳母車、(五) 車輛部分品及附屬品

D 經濟團 航空機工業

分團——(一) 飛行機製作、(二) 飛行機發動機製作、(三) 飛行機取付部分品、(四) 飛行船製作

E 經濟團 電氣工業

分團——(一) 機械、(二) 變壓器、(三) 裝置、(四) ラヂオ、(五) 設備材料、(六) 絕緣管、(七) 絕緣材、(八) 電線電纜、(九) 電信電話、(一〇) 測量器械、(一一) 電氣醫療器、(一二) 白熱燈、(一三) 電氣計器、(一四) 蓄電池、(一五) 蓄電器、(一六) 電氣用炭素及核子、(一七) 電熱器什器、(一八) 照明裝置、(一九) 整流機、(二〇) 配電裝置、(二一) 架空裝置、(二二) 鐵道用品、(二三) 自動車用電氣附屬品、(二四) 電氣工業の特殊分野

F 經濟團 精密機械裝置及光學機械

分團——(一) 光學機械、(二) 精密機械、(三) 醫療機械、(四) 時計製造業

第三主要團

經濟團 鐵製品、ブリキ製品及金屬製品工業

分團——(一) 鐵製品及原料精鍊、(二) ブリキ製品、(三) 鐵器、鋼製品及工具、(四) 金屬製品

第四主要團

A 經濟團 石材及土壤

分團——(一) セメント工業、(二) 石灰業、(三) 耐火業、(四) 道路鐵道及水路建設用自然石、(五) 煉瓦業、(六) 石膏業、(七) 石管業、(八) 石灰石業、(九) 砂利業、(一〇) 白墨業、(一一) 輕石業、(一二) 珪藻土、(一三) 混凝土工業、(一四) 泥炭業、(一五) 重晶石、(一六) 寶石裝身具工業、(一七) 粘土及陶土、(一八) 石細工、(一九) 天然石材業、(二〇) 鑛滓業、(二一) 漆喰工業、(二二) 絶緣板、(二三) スレート工業、(二四) 鎔鑛爐鑛滓、(二五) 岩石選鑛、(二六) 天然石瀝青土

B 經濟團 建築工業

經濟團 木材加工業

分團——(一) 家具製造業、(二) 樂器工業、(三) 建築工業、(四) 包裝具工業、(五) 樹皮工業、(六) 木材製品工業、(七) 木彫及木型業、(八) ステツキ、傘柄、鞭、(九) 箒、刷毛、(一〇) コルク工業、(一一) 籐製品、籐製家具、(一二) セルロイド製品

D 經濟團 硝子工業

分團——(一) 壘製造業、(二) 板硝子、(三) 硝子加工業

E 經濟團 陶器工業

分團——(一) 陶甞及齒科用磁器を含む家庭用及裝飾用磁器工業、(二) 土器製家庭用裝飾用品、(三) 陶器類、(四) 電氣工業、工學及化學工業用磁器、(五) 衛生用陶器、(六) 陶製プレート、(七) 陶土業煖爐及建築用品、(八) 研磨劑

F 經濟團 鋸工業

分團——(一) ベニヤ板製造、(二) 木材防腐、(三) 鑛山用木材、(四) 鉋製造及薪挽鋸

第五主要團

A 經濟團 化學工業

分團——(一) 硫酸、曹達、アルカリ電解及附屬製品、(二) 其他の基礎化學製品、(三) タール染料及その中間製品、(四) 藥品、(五) 植物保護劑及害蟲驅除劑、(六) エーテル油及香料、(七) 人體用保護劑、(八) 寫真用化學製品、(九) 爆發原料及爆發藥、(一〇) 鑛物染料、(一一) ラック、(一二) 清淨劑及化粧劑、ステアリン及纖維補助材料、(一三) 美術用材料、(一四) 肥料、(一五) フアイバー化學製品、(一六) 石鹼及洗濯用劑、(一七) 礦油及礦油製品、(一八) ギム工業、(一九) 雜化學製品

B 經濟團 製紙、植物纖維及パルプ製造業

分團——(一) 製紙、(二) 厚紙製造、(三) 植物纖維製造、(四) 木材纖維製造

C 經濟團 印刷、紙加工業

分團——(一) 書籍印刷、(二) 平版印刷、(三) 化學版、(四) 精紙、(五) 製本、(六) 包装材料、

(七) 紙製品、(八) 壁紙
第六主要團

A 經濟團 皮革工業

分團——(一) 皮革製造工業、(二) 調革及工業用革具、(三) 革製品及靴工業、(四) 革手袋製造業、(五) 製靴工業、(六) 家庭靴工業

B 經濟團 纖維工業

分團——(一) 綿紡績、(二) 毛絲紡績及質梳刷、(三) 梳毛絲紡績、(四) 人造羊毛、人造棉毛及類似工業、(五) 撚絲、縫絲、手編絲製造、(六) 靱皮纖維、(七) 綿織物業、(八) 織布及服地業、(九) 絨氈、家具用材料、特殊毛織物及綿毛、(一〇) 生絲及ピロイド工業、(一一) 編物業、(一二) 帶、打紐、レース、(一三) 刺繡、(一四) 纖維加工業、(一五) 雜纖維工業

C 經濟團 被服工業

分團——(一) 毛皮工業、(二) 男子用上衣製造業、(三) 女子用上衣製造業、(四) 肌着類製造業、(五) 裝飾品製造業、(六) 帽子製造業、(七) 被服附屬品製造業

第七主要團

A 經濟團 食料品工業

分團——(一) 製粉業、(二) 脫穀業、(三) 製パン業、(四) 甘味品製造業、(五) 肉類業、(六) 魚類業、(七) 油及脂肪、(八) 果實及野菜加工業、(九) 澱粉工業、(一〇) 榮養品製造業、(一一) 糧秣、(一二) 珈琲代用品、(一三) 冷凍業、(一四) 三鞭酒製造業、(一五) 礦泉製造業、(一六)

煙草製造業、(一七) 食料品製造業

B 經濟團 釀造業

C 經濟團 麥芽製造業

D 經濟團 製糖業

E 經濟團 酒精工業

分團——(一) 馬鈴薯火酒製造、(二) 糖蜜製造、(三) 酵母製造、(四) 酒精清淨裝置、(五) 穀物火酒製造、(六) 葡萄酒製造、(七) 小及果實火酒製造、(八) 携帶用ブレンダー製造

(2) 手工業全國團——小經濟團

分團(全國組合聯合會)——ベーカー、綳帶製造及整形外科用品製造業、建築業、桶匠、釀造及麥芽製造、製本、書籍印刷、銃製造及小刀鍛冶、刷毛製造、屋根、婦人服裁縫、打穀業、寶石細工、電氣取付工事、染物及化學清淨、屠殺業、理髮業、彫刻及帶、硝子屋、取付工事及ブリキ職、寶石金銀細工、菓子製造、籠製造、自動車手工業、皮革業者、帽子及手袋製造業、畫工、機械、樂器製作、粉屋、光學機械及精密機械製作、鋪裝及道路建設、寫真業、裝身具製作業、綱帆製造、看板製作、照明廣告、錠前師、鍛冶職、男子服裁縫、煙突掃除、靴製造、彫刻及石工、車及車臺、漆喰細工及石膏細工、馬具室內裝飾クツション製造、指物師、製陶及窯、時計製作、下着類裁縫織物及編物、齒科技工、建具

(3) 商業全國團

A 經濟團 卸賣、輸入、輸出業

分團——石炭、鐵鋼、古鐵、金屬、金屬半製品、礦油、機械、自動車部分品及附屬品、自轉車及自轉車部

分品、電氣、ラヂオ、樂器、光學機械、鐵製品及金屬製品、貴金屬製品・裝身具・眞珠及貴石及金細工品、時計及同部分品、建築材料、硝子及陶器、衛生水道設備、合板及木材製品、籐製品及蘆、コルク、工學用化學藥品及賣藥、人造肥料、藥劑及醫療品、化粧品及石鹼、工業用品、ゴム、工業用油脂、ラック及染料、紙、紙・文房具・事務用品、織物及衣服類、纖維原料及半製品、革、生革及皮革、毛皮品及毛皮、靴、煙草、煙草原料、クツシヨン及馬具、製靴需要品、花環園藝需要品、動物及養魚品、酪農及乾酪製品、釀造及酒藏品、肉、齒科及實驗室必需品、小間物・玩具、麟裝、未製品、食料品及嗜好品

B 經濟團 小賣業

分團——食料品及嗜好品、煙草、纖維品—小賣業、靴—小賣業、革及靴需要品、石炭、鐵・鋼・金屬製品、硝子及陶磁器、運動用品及狩獵用品、玩具・籐製品・乳母車、革製品・工藝品・小間物、動物・生畜、保健體育用品・化學・光學及外科用品、自動車及同用品、ガレージ及ガソリンスタンド經營、農業機械、裁縫機、自轉車、事務用器械、家具、絨緞及リノリウム、寶石・金銀製品・時計、グアイオリン・樂器類、切手、古物、葬儀品、ラヂオ、紙・文房具・事務用品、照明及電氣・衛生冷房設備、銑鐵

C 經濟團 料理店及旅館業

分團——料理店、旅館業

D 經濟團 仲買商

分團——代理人及仲買商、土地及不動產仲買商、保險代理店及保險仲介業、建築代理業及仲介業、競賣人

E 經濟團 移動營業

分團——民衆娛樂及射的、移動商業（國食糧團商業を除く）、移動食料品商業（國食糧團商業）

獨立分團（經濟團に屬せざるもの）

相談案内業、自動販賣機陳列業、見張業、花環製作業、溫泉經營、外國廣告業

(4) 銀行全國團

A 經濟團 民營銀行

分團——(一) 株式銀行、(二) 民營不動產銀行、(三) 民營銀行業者、(四) 穀類仲買人、(五) 自由仲買人

B 經濟團 特殊公營銀行

C 經濟團 公法上の金融機關

分團——(一) 中央信用機關、(二) 信用銀行、(三) 長期信用銀行及發券銀行、(四) 振替中央所

D 經濟團 貯蓄金庫

分團——公營建築貯蓄金庫

E 經濟團 信用組合

分團——(一) 農業信用組合、(二) 商工業信用組合

F 經濟團 各種信用企業

分團——(一) 私營建築貯蓄金庫、(二) 目的貯蓄企業、(三) 私營質屋經營、(四) 分割拂信用企業

(5) 保險全國團

A 經濟團 民營保險

分團——(一) 火災、盜難、風水害、暴風、動亂、硝子保險、(二) 運送、空輸、機械保險及統一保險、

(三) 傷害、責任、自動車保険、(四) 電害、家畜保険、(五) 生命保険及葬儀費積立組合、(六) 疾病
保険、(七) 再保険、補償及信用保険、保険總代理店

B 經濟團 公法上の保險

分團——(一) 火災、盜難、風水害、動亂保險、(二) 傷害、責任、自動車保険、(三) 電害及家畜保險、

(四) 生命保險、葬儀費積立組合、(五) 疾病保險、(六) 再保險

(6) 動力經濟全國團

A 經濟團 電力供給

B 經濟團 瓦斯及水道

右は産業別による横の團體別であるが、この横の各産業は地域的に經濟會議所——商工會議所其他の地域團の綜合團——を以て結びつけられ、その地方的のものが中央において更に全國的の經濟會議によりて結びつけられ、斯くて全産業は横の同一産業團體が綜合されて、それぞれ地域的に結合されながら、それが中央で集中綜合されるのである。

なほ經濟團としては、この他に交通機關のものと、農業(獨逸では主として食糧、日本では生糸の如きは原料的農業)團體とがある。

これ等の全國的中央經濟會議所と經濟大臣、農業團と農務大臣とが提携する所に、企業は國家的生産經營體であると共に業者の創意を活躍させる私的團體でもあり、二重性格を顯現發揮するのである。

二 日本の産業團再編成

日本の産業構成は、ドイツと異なり、重工業に偏せず多様性がある。且つ財閥が存在し、中小企業も非常に多いから、その再編成はドイツより遙に困難であらう。

で(A)最緊急な基礎部門から徐々に實現すること(B)同一産業でも既に聯合會——カルテル化を完成せる大企業と中小企業との二大別(C)小賣商のごときは小地域別に合同せしめて配給組合とする事(D)縦横に網を張る財閥をいかにするかの問題。政黨は新體制の聲だけで發展的解消をしたが、財界の各企業體たる財閥、カルテル及び中小企業は政黨のごとく簡単に解消できない。私的資本の據りて立つ利害の根源は頗る深く且つ廣く張つてゐるからである。企業體は大小こそあれ、今までの政治のやうに根なし草や國民生活と遊離したものではないからである。それだけに少々のあらし位では倒れないのだ。ここに難問がある。これ等を活用するか或は思ひ切つて解消すべきであるか、殊に國策會社や財閥など一王國を作つてゐるものに於て問題である。

また産業團の地區的連結單位たる經濟會議所は縣單位にすべきか或は全國を北海道・東北・關東・關西・九州の五大ブロック單位にすべきか一つの問題であらう。産業の種類によりては一縣でも充分の單位となるべく反對に大ブロック別でも不完全なものもあり、具體的にはこれも問題である。

農業團のごときは、農業者の数が多く、しかもその主要生産品の種類は僅少であるから部落を下部

構造とし、その上は町村(郡)府縣、全日本農業團(組合又は聯合會)とせば可なるも、商・工は複雑であり、有機的に原料と半原料・製品間の錯綜もあり、同産業の地域結成は現在の行政區域別でもいいが、各種産業を総合せる經濟會議所は寧ろ大ブロックの地域を單位とすべきであらう。

三 農業團體の整理

團體對立の弊 農業團は比較的單純なものであるが、現在の日本ではその數五十有餘ありといふ。これが爲に次の弊がある。

(A) 團體の相剋と指導方針の不統一

(B) 人的・物的の重複と無駄。組合間の組織にもあり、また組合員として農家の金銭的・勞力的負擔にも浪費がある。講演會でも主催團體が異なるために同じやうな事に多忙時にしばしば引張りだされるのも一例である。會費はいふ迄もない。

帝國農會と産業組合 現在の團體で最大なのは農會と産業組合であり、その他に負債整理組合とか水利組合、農事實行組合、森林組合或は技術的の組合などがある。

帝國農會は農業全般の改善・發達を圖るにあり、従つて農業の研究・調査から指導獎勵も、進んで農業者の福利増進、紛議の調停にまで及ぶ。明治十一年頃から次第に發展し、二十五年頃に各府縣で系統的に發展したものである。

これに對して産業組合は協同組合運動の一として發生したもので、目的は中・小産業者が協同の力によりて、その地位の存立を確保しようとするものである。現實的には大企業とか商人の利潤搾取に對抗して起つてゐる。一般消費者の購買(又は消費)組合とか信用(無盡・頼母子講もこの一種)組合などが是であつて、産業組合は中・小産業者の協同組合である。日本では明治三十三年に産業組合法が公布された。本來は農業だけのものでないが、同種産業が地域的に結合せる農業に適合し、今やそれが生産・販賣・信用・購買部門に分化して、全農家を網羅するに至つた。

農會と産業組合は理論的にはその分域を異にするから並立の必要がある。だが、實際には農會の會員たる地主と自作人及び小作人の利害が對立せるため、その統制が困難であり、勢ひ他の團體の發生を促進するに至つた。ここに現在の農村團體割據の原因がある。

全體主義と職分奉公 しかし乍ら斯やうな對立は猶ほ資本家と労働者の對立と同じく自由主義的營利經濟に立つものであつて、利益の爭奪を建前とせる階級主義にほかならぬ。

全體主義時代においては、すべての人々がその分擔職域を通して國家に奉仕する。資本家も地主も企業家もその經濟活動が自己の利益のためでない如く、労働者も小作人も技術家もサラリーマンも亦その經濟活動は決して自利のためでも資本家や地主のためでもない。實に國家發展のためなのだ。

だから、農會も産業組合も其他の組合も曾て階級的立場に出發し或は現にその立場にあるものは、この際すべて發展的解消をなし、農業組合も亦別の立場で再組織されねばならぬ。

別の立場とは何ぞや、いかにせば農業産物を國家發展の必要に應じて増産すべきかが是である。從來のごとく地主も小作人も自家の貨幣的収入の増大をのみ圖る私利的經營を捨てる事だ。

もし斯る觀點から農業團體を再編成せば、既述のごとく地域別農業組合を下部の部落から市町村——(郡)縣——(或は五大ブロック)及び全國中央聯合團となし、その上部の方は研究的・指導的となし、その中に各種の部門別を設け、下部に行くほど指導性から實行性團體に變更せば足る。縣とか郡の組合(或は聯合會)はその中間性を帯びるものとなるであらう。

第三 利潤統制の要請

一 公益主義と利潤

全體主義下においては、何人もその職場を通じて國家發展に貢獻する。従つてその職業も職場も亦自由主義時代と同一でない。自由主義時代には營利性ある職業が存在し、然らざるものは淘汰されて滅びたが、全體主義下では國家の發展に必要な職業のみがその存在理由をもち、その緊急性に應じて重點價值が附せられるのである。だから、既にその存在を許容されたもの——必要と共に是正されるが——は國家發展のために必要不可欠のものであつて、その價值に一應輕重大小はない。むしろ、

總理大臣と一職場の部分擔當者が平等といふのではないが、その部分も國家發展に必要な存在であるかぎり、何人かが之に當らなければならぬ意味において、總理大臣と同一の存在理由を主張できる。

同じ意味で第一線の軍隊も銃後の産業戦士もまた異なるところがない。云ふまでもなく銃後の産業戦士がなければ、第一線の軍隊も勝つことができぬ。すべてが不可分の有機的つながりを持つてゐるからである。

ただ、同じ労働者といつても生命の危険多き坑夫は、地上の労働者よりもより厚き待遇が必要であるやうに、第一線の軍隊や國家のトップにある總理大臣は、それ相應の、換言すればその勞力の再生産に必要なだけは酬はれなければならぬ迄だ。

この事は資本家や企業家と労働者との關係にも云へるのである。一個の人間として又産業戦士として、何れも國家の發展に缺くべからざる役割を果せるかぎり、お互ひに自己並びにその家族の生存權をもつ。當然の結果として労働につくの權利と義務、従つてまた生活を保障される權利と義務をもつのだ。

かやうな生存——労働——生活の權利義務から云へば、その報酬もまた一應は均等であつて宜い。それが謂はゆる最低生活の保障であり、或は家族數による割増し或は養老保險制度である。

自由主義時代において企業家の得る利潤は、その最低はむしろ企業家の生活費である。だが、その最高は企業家の利潤が、元來他の生産要素たる労働の賃銀、土地の地代或は資本の利子と異なり前定的

に保證されてないから非常に利益もあるが或は見込違ひで非常な損もある。時には没落もなければならぬ。この危険性こそ利潤の自由が認められた所以である。畢竟するに過大利潤は過大損失と相殺して企業の自由に附随したのである。

然るに今や企業自身が、全體性の必要によりて制約せられ、冒險性を缺く他面において危険性も減するとせば、その企業利潤が企業の存立（固定資本の銷却など）と企業家自身の存在（一家の生計費）を基準とし、これに企業的活動に對する附加的報酬（宛も礦夫が他の労働者よりも高賃銀であるやうな）を加算したものが適正であらう。株主その他の半企業的・資本家——公債の所有者や銀行預金者よりも多少の冒險性を帯びるから、これ等の純資本家に對し半企業家半資本家である——の配當も公債の利子に若干の冒險性利益を附加したものを適當としよう。この冒險性利益は恐らく大正九年から昭和十四年までのデフレ時代とインフレ時代との株式配當率を平均し、その配當率とその間の公債の利子平均率との差額率に認められよう。

一體インフレ時代に企業利益の多いのは、その会社の努力といふよりも社會情勢や世界經濟或は國家活動の結果であつて、企業家自身の能力によらない。之はちやうど地代が社會發展のおかげで昂騰するのと同じであつて、土地所有者の努力は誠に僅小なのと同じである。従つてその利益のすべてを恰も自力で獲得したかのやうに思ふのは一種の錯覺である。

問題は同じインフレ時代でも、第一流の企業は生産費が安く、第四流五流の企業は生産費が高い。

そこで第一流企業は第四流五流企業より利潤が多いのである。これは全く第一流企業が多年の努力が酬ひられたか或はその企業家の能力が優秀なためかであるから、その優秀なる能率に對して、第一流企業が低生産費と物價高との差額から得る剩餘利潤は幾分その企業家にも分與すべきであらう。然らずんば何人も努力しなくなる。これを如何にすべきかは公益性と企業能率の項で後述するであらう。なほ利潤統制の行はれる技術的條件として、(A)會計簿記要式や利益勘定の表はしかたの統一 (B)その監督の必要なるは云ふまでもない。

二 物價と利潤統制

インフレ政策の限度 何事にも限界がある。經濟學でこれを限界効用遞減則といふ。例へばコーヒーでもシルコでも初めの一杯はうまいが二杯・三杯・四杯と重ねては如何にコーヒー黨もうんざりせざるを得ない。これは又何事もその混合・化合に釣合ひの必要を教へるものである。關係則或は比例則といはれる。榮養上でも、含水炭素と脂肪と蛋白やビタミン、ホルモンの攝取には一定の比率を保つことが必要であつて、ビタミンばかり取つても何の役にも立たず却て有害となる。同じビタミンでもAばかり取つては却て頭が禿げたりする。ビタミン間にも一定の比率が必要なのである。

いまインフレ政策も既述のごとくその限界に達したのは、この比例則の現はれである。即ち一國の經濟力を組成する物（資材）と人的資源（勞力と企業力技術力）と金（貨幣）の流通量とが、その比

率を失した爲である。マテリアル Material Man パネー Money の三ヘム中で通貨のみ多くして物的資源と人的資源とが之に追隨しない通貨過多症——多血質——がインフレ悪化の徴症である。通貨の膨脹率以上に物價昂騰率——闇價格や品質低下・分量減少も含めて——が大であるとか或は物の生産量増加率が通貨膨脹率に伴はないのは凡てそれである。

合理化と利潤統制の地位　そこで物價低落は今や單に國民生活或は貿易の至上命令たるのみならず、また同時に生産擴充のためにも至上命令となる。生産力を増大せんが爲に價格をこれ以上高めては益益悪循環を激化するからである。インフレの効果が生産的に作用せず、徒らに賃金生活費高や賃銀高や生産費高や消費増を招來するに過ぎないからである。利潤統制はこの矛盾を解決せんが爲に登場したものである。

元來、物價低減のためには、物の生産量を増加するか、消費量を減少するか、或は生産コストを低減するかが自由主義經濟の物價低廉策であり、しかもそれ等は物價高を契機として一方に生産増加、他方に消費減或は機械の利用による合理化と高賃銀労働者の解雇などで解決せられた。それが凡て資材關係その他で行詰まつたのである。残る所は利潤統制あるのみである。

利潤統制の方法　元來、自由主義經濟では利潤の大小は物價の高低に比例し、利潤は物價高低を決める原因ではなく、むしろ結果である。それを今は逆に利潤を統制して物價高を規正しようとするのである。それにはどうすれば善いか。

既に云はれるごとく、すべての同種生産者を一聯合體として、その利潤總計をプール化し平均化するほかはない。

一トンの生産費十五圓の石炭業者も、二十圓のものも、二十五圓のものも、どの生産者からもその生産費に適正利潤を加へたもので買上げる。いま適正利潤を一トン一圓とせば、その組合の平均買上げ價格は二十一圓である。従來は一トンの生産費十五圓の會社も、二十圓、二十五圓の會社も一樣に二十五圓で賣つたから消費者は高く買はされ、生産者の一部は不當の利潤を得たのである。

自由主義經濟では一市場に一價格しかなく、品質分量が同一であるかぎり同種製品は常に最高生産費——最大無能率者の生産費——で決まる。買手が多いために、その値段までセリ上げるのだ。利潤統制は之を是正してその中庸または平均値段にまで引下げ、而も今まで通りの生産量を確保せんとするのである。

その實現條件が同種産業の組合化と企業家の利潤追求慾の抑制、公益第一主義である。同種産業の組合化は客觀的事態であるから或は政治體制の強壓により之を確立できよう。企業家の利潤慾抑制は主觀的・心理問題である。果して一朝一夕にして私益から公益への轉換が可能であらうか。

三 公益優先と經濟倫理の規範力

大化革新の失敗・明治維新の成功　日本歴史の最大革新は大化と明治の御一新であるが、大化革新

はその理想が全體主義であり、總力戦の構への爲であつたにも拘らず、間もなく失敗した。(拙著「海洋世界興亡史」一〇三頁) 何故であるか。大化革新は餘りに全體主義の立場に囚はれて全體を動かすモメントたる個の活動を刺戟するホルモンを忘れたからである。土地公有では土地の開拓が期せられず、増加する人口を包容できなくなつたからである。これは全く個人(個人、私的事業)の生存發展慾望に眼を蔽うた結果にほかならぬ。

これに反して明治の御一新が成功したのは、徳川以來、その貨幣經濟の發達とともに何人にも貨幣慾——營利衝動——が漸く強まらうとしてきた丁度その際、個人主義と自由主義とそして營利主義を基調とする資本主義經濟に解放した。ここに明治御一新の成功した原因がある。だから何事でも成功するには、やはり歴史の方向と共に移らねばならぬ。

では、來らんとする公益優先主義はどうか。同じ資本主義でも獨占時代の現代ではその多くの人が大企業のサラリーマン化してきた。彼等の多くは營利慾の追求を以て唯一のその生活起動力としてゐない。だから、私的利潤追求の廢止に代へて公益優先主義や職分奉公主義は必ずしも困難でないやうでもある。

利潤追求慾の程度 だが、(A)ドイツと異なり日本のやうに中小企業家の多いところでは、營利慾を以て唯一の生活起動力とせる社會階層が可なり多くの部分を占めてゐる。

(B) サラリーマンの多くは、サラリー自身がその凡ての目的ではないが、と云つて、現在與へら

れてゐる職場の仕事自身が唯一の興味であるとも見られない、出世慾といふか榮達慾といふか、とにかく重役階級になることがその動因の重大要素を占めるは何人も否定できぬ。

重役階級には一種の社會的名譽があり、生活の自由もありて之が營利慾以外に一般サラリーマンの憧憬のまゝとなり、さらに企業創造の衝動も満足できる。だから、斯る重役階級も人により、事業の如何により、或は会社の大小によりその起動力は種々であつて、大會社の重役のごときは貨幣獲得慾よりも事業創造慾或は社會的名譽慾を主とすべく、之に反して中小會社の重役はこれ等の欲望よりも利潤追求慾が一層強いかも知れぬ。

利益から名譽慾と創造慾へ そこで、公益優先主義を實現するには利益慾から名譽慾並びに創造慾に乗換へしむるにある。

經濟倫理と云ふも單に滅私奉公ですべての人を十年も二十年も縛りつける事はできない。單に時代の要求によりてその起動力を轉換せしむるに過ぎぬ。名利館のごとしと言ひこの二つは人間を動かす大きな力と見られるが、その中で利の方は貨幣經濟が發達してから生長した衝動であつて名譽慾に比すると、遙に弱く且つ淺いのは生活原理の人間衝動分析で述べたところである。ただ、何人も名譽慾を満足できないから比較的満足し易い營利慾に走つてゐるのである。自由資本主義が萬葉の櫻花のごとく咲き誇つて、現代文明を今日の華やかさにまでもち來たしたのも、貨幣獲得が名譽獲得よりも伸縮的であり且つ普遍的なためでもある。

いま私益性を止揚して公益性を企業活動の指導精神とするには、むしろ愛國心と經濟倫理で燃え立たせるべきだが、之を裏付けするには名譽心と創造的衝動に訴へねばならぬ。

創造的衝動の實現條件 しかし乍ら創造的衝動として、之を唱へるだけでその衝動が起るものではない。その衝動が最も能率的に發動するには、各人がその個性に適した職業職場を擔當しなければならぬ。今日多くの人々のたづさはる職業は、必ずしもその個性に合致したものを選んでゐるとは云へないのだ。已むなく趣味の轉換から營利慾やその他の慾望を追求してゐる人も多いであらう。

その職業とその才能その趣味とが幸にも合致し、その職域に創造的衝動を覺え、一意専心、職分奉公に全力を擧げうる人がどれだけあらうか。

故に仕事の創造衝動を個人の生活指導力とするためには、個性と職業との可能的合致に就いて、國家もこれに意をくばるべきである。

既述の如く學校におけるより精確なる性能調査と職業指導、各官廳・各企業においてその採用試験にその職業と性能との關係について一層留意することなど基本條件である。

名譽慾の代用衝動 私益追求を放逐して、公益優先主義を實踐的に裏付けるために、創造衝動の新たなる動員とともに一層必要なのは、名譽衝動である。勸業債券の富籤や割増金つき公債が、その當籤率の尠なきに拘らず人氣のあるやうに、名譽衝動に對する刺戟も、一つは希望的のものである。その

名譽を努力次第で得られるとの希望を與へさへすれば現實にその名譽を射止める人は一人であつても、萬人の活動を刺戟する力をもつてゐる。

創造衝動はその仕事とその才能と現實的に合致しなければ誘發されないが、貨幣獲得（營利的）衝動とか名譽衝動は強ひて現實的なるを要しない。希望さへ與へらるれば足る。ここに私有財産制殊に營利衝動中心の資本主義が一國の經濟發達と文明文化の進歩に普遍妥當性をもつた原因がある。

故に公益優先時代に生産能率を擧げるためには何といつてもこの名譽衝動の大衆的解放に俟たなければならぬ。換言すれば何人も名譽を得る機會の均等に恵まれる事である。ちやうど明治維新に際して何人も金儲けの機會均等に遭つたやうに。之がために必要條件は次の如し。

(A) 勤勞はその職業の如何を問はず、直接間接わが國力の増進に役立つもののみが許され、従つて現に許されてゐる職業と職場はすべて是れ國家總力戰に不可缺の一環として尊重さるべき事。同時に國家としても、無爲無職者にはその原因の如何を問はず、その能力相應の職場を授與する設備を完整し勞働は權利であり義務であり名譽であるの觀念を植付け、その實現對策を講ずること。

(B) 全經濟團體は(イ)産業別に、(ロ)地域別に且つ(ハ)下部構造から上部構造に立體的ピラミッド型に編成さるべく、それぞれの部分と地域に、それぞれの企業指導者があり、その指導者から選任又は任命されて上部の指導者があり、その指導者たちの中から更に選任又は任命されて中央部の指導者ができるやうにし、その指導者に企業の指導權を與ふれば、そこで自然にそれ相應の社會的

名譽が認められるであらう。

同時にその指導者は地方又は中央の經濟官廳と協同して、生産力擴充計畫に参加するの權限が得られ、それに由つて指導者が國策遂行に誇りをもたしむ。

(C) 企業的指導者以外の勤勞者たる技術家、サラリーマン及び勞働者にしても、單に物質的報酬の他に國民章とか勞働章とかを名譽の表彰として、政府、總理大臣或は厚生大臣が、それぞれ與ふべきである。

(D) 進んで官吏と同じく、その職務年限或は特別の功勞により、位勳も與へ、または職能代表の政治機關・立法機關に選出又は任命されねばならぬ。

總力戰時代に官吏と民間人との待遇を異にするのは、一般的に云ふと舊體制の觀念にほかならない。一君萬民である時に官吏は臣であつて他のものは民であるとして、臣民を區別するが如きは既に誤つてゐるのだ。

(E) この指導者主義 Führer Prinzip が正しく運行するためには(イ)何よりも指導者にふさはしい人格と實力ある人がフューラーたらねばならぬ。選舉か任命か。いかにせば斯かる適才が適所に就きうるか。今後の大きな問題である。(ロ)賞罰が明かにされなければならぬ。フューラーとして何らかの意味で資格なしと實證された以上は直ちに誡首され、新なるフューラーと入替へねばならぬ。この二つの條件は情實主義や親分子分の關係が根強き日本では、その實現は容易でない、容易では

ないが、この困難が克服されなければ、新體制は形式的にできても、實質的にはその効果を擧げられない。ドイツを見よ。ヒトラーが大ヒトラーとして絶頂に立ち、それから次ぎ次ぎへと、その實力に應じて全ドイツ國の政治・外交・軍事・經濟に互りて網の目のやうにピラミッド的構成をしてゐる。ここにドイツの強さがある。

營利衝動慾も加味 創造衝動と名譽衝動は公益優先時代を支へる二大礎石であるが、そのすき間すき間は依然として營利衝動のセメントを以て固めなければならぬ。今まで營利衝動を動力源として活動してゐたものは、一舉にしてその動力源を石炭から石油にするは容易でないからである。

即ち利潤の統制を圖るために、各企業體の原價計算を精密に測定するが、もし或る企業體が能率上昇の結果、その所定原價計算以下にその原價を低減し、由つてもつて生じたる餘剩利潤は一應その會社の自由處分に委ねる事である。

これと共に原價高き會社が數年を経るも毫も改善の跡なき場合は、その指導者を入替へるはもちろん、時によりては他の企業體への合併を強制命令しなければならぬ。

四 觀念化する勿れ

御一新にはすべて上からの標語とし、大義名分の體制づけが第一義なるは云ふまでもないが、その

中味には生きて人間性と民族性の肉づけがなければならぬ。大化の革新が失敗して明治維新の成功したのも、この肉づけの有無にあつた事は前述したところである。

ドイツの統制経済の成功もまた強力の他に、微妙なる人間性とドイツ民族性が織込まれてゐる爲である。

人間性には營利衝動のほかにさまざまの衝動があり、國民性や民族性も國により又その歴史的段階、或は特殊の國情によりて千種萬態の様相を呈する。この機微を洞察せず、單に公式的觀念的に體制を整へても、その創設者の意圖せざるあらぬ方向へと轉化しないと何人が保障しよう。

ここに小指導者・中指導者・大指導者、そして最後に國務大臣、それから總理大臣の人格と實力の重要さがある。正宗の名刀もメツサー・シュミット機も、運用の妙は一心に存する。然り、すべてを決する始めも人であり、終りも人である。最大、最強の力量者をしてピラミッドのトップに立たしめよ、然らば日本もまたドイツの如く世界のピラミッドの頂に登るであらう。

第十二章 労働の奉公性

第一 生産と労働

一 生産の要素と原價

企業は生産のために、生産に必要な手段を集めて組織化する。その手段は土地・勞力・資本である。

各企業體の個々から見ると、この他に原料とか電力とか經營費とか、さまざまの必要手段があつて、これも生産要素であり、生産費即ち原價を構成する。だが、原料にしても燃料（石炭）や動力（石油・電力）等にしても、これを分析すると天與の資源に勞力をかけて或は生産し或は採掘したものであつて、その代價は結局その生産・採掘に要した勞力代の集積に過ぎぬ。

米にしても棉にしても、その生長には地力、水及び太陽の光熱が必要だが、土地も水も太陽もその生産費を要求しない。要求するのは水を田に引張つてくる人間の勞力代や肥料代——それは又肥料を生産した人間の勞力代でしかない——或は田植、草刈りから收穫までの人間の勞力代である。

水力電氣だつて、之に代價を拂ふのは天の與へる水力に對してではない。その水力を電力化するために種々人間の勞力が投ぜられたその勞力代に拂ふのである。

二 資本も亦勞力の集結

一般に生産のコストと云はれる費用は、従つてすべて土地の地代、勞力の賃銀、資本の利子のどれかに這入るが、その資本すらも實は勞力の凝集に過ぎない。

資本の代表である機械を分析すると、天の與へる無價の鐵礦とその鐵山の採掘權利料——即ち地代——と、あとはその鐵礦を機械にまで作りあげる人間勞力の成果である。だから、資本たる機械の代價は地代と勞力に拂はれる賃銀及び企業利潤（廣き意味の人間勞力の一種）との集積に過ぎない。

故に生産の要素は土地——自然並びに自然力——と勞力並びに資本といふも、資本は無價の自然物に勞力が加工して作られた生産物に過ぎないから、眞の生産の要素は土地（自然）と勞力だけになる。所で土地は人間の生産できないものであるから、それに生産費はない。だから本來は無代なのであるが、需要（使用者、或は借手）が多くて供給がこれに伴はないやうになると、そこに地代が発生する。

る。

地代は需要・供給で定まるから一定したものではなく、良い山、良い場所、良い肥沃地などは借手や使用者が多いから高くなり、場末や日蔭地や貧瘠山は地代が安い。従つて地代は企業家によりて、その生産費として支拂ふ比率は違ふが、多くの地代を拂つてゐる所は多くの儲けがある爲でもあるから、——むろん日本の小作人の拂ふ地代は歴史性により必ずしもこの法則によらない部分もある——各自銘々の企業家としては特別の負擔とはならぬ。

だが、社會的に見ると一つの問題となる。元來、地代も利潤と同じく、物價が高くなるから、そこで今まで使用されなかつた土地や資源を開発しても引合ふので土地の需要が起り、ここに地代が高くなるのである。

物價高の結果ではあるが、今では物價高を制する必要は利潤に命令するごとく地代にも命令する。だから、その根本的解決は利潤統制と同一方式によるべきであらう。

第二 生産費と労力の合理化

一 賃銀切下げの三形態

あらゆるものの生産費は右のごとく推しつめると労力に對する賃銀に歸着する。そこで生産費の合理化を根本的に考へると次の三つに要約される。

(A) 賃銀を引下げること。

(B) 物價高のために賃銀の引下げが不能の場合は、生活の簡單化を通して賃銀を引下げること。

(C) 機械力を以て労力に代へる事。

生産の合理化は最小生産費で最大効果を擧げることであるが、その最小生産費は主として以上の三策のどれかが採用されたのである。

日本では主として(A)の賃銀引下げが、米國では主として(G)の機械化が常に行はれる。國力の差からくるのであらう。だが、單なる賃銀の引下げは假令物價低落とその歩調を一にしてゐても決して能率を擧ぐる所以ではない。労働者に働き甲斐を感じしめないからである。これ(B)の必要なる所以である。

(B)の據つて立つ生活合理化は生活内容を引下げずに、生活簡單化により生活費を引下げることによりて、或は生活の實質を高めて能率低下を防止し、或は賃銀引下げをやつても生活の實質低下を防止するのである。

ドイツの強味は實にこの三者を並行したところにある。

二 全體主義と社會政策の變化

いま機械化による生産の合理化は別とし、労働力による産業合理化こそ社會政策の對象であらねばならぬ。

社會政策と分配問題 元來、社會政策は資本家の搾取に對し、労働者がそれに反抗して起つたものである。換言すれば、その利潤の分け前に與からんとし、國家も兩階級の軋轢防止のためにその調和を圖るために採つた政策である。故にそれは分配問題であつた。

社會政策と生産問題 だが、その後、資本家にとりても、その生産能率を高める上に、社會政策或は福利政策の反つて必要にして有利なるを感じ、少しく遠見達識の大資本家はその立場から國家の社會政策とともに或は之に先じて、いはゆる社會政策的施設を自ら試み、同時に國家にも要請するに至つた。

労働時間の制限、疾病保險其他の各種保險などが是である。だが、この場合の社會政策はその目的

が生産能率にあつたが、その生産は私的企業の利潤増大に過ぎなかつた。それが最近までの社会政策の基調である。

国力増進と社会生活 然るに現在の全體主義、總力戦時代においては、今や勞力もまた單なる私的企業の利潤増大のために存するのではない。他の職業と同じく国力増進のために存するのである。その結果は社会政策の方法もまた一變せざるを得ない。

(A) 労働者は企業家の使用人でなく、國家の産業戦士である。

(B) 社会政策もまた賃銀引上げ、労働時間の減少が目的でないのは勿論、いまでは労働者個人の單なる厚生が目的でない。國家の産業戦士としていかにせば、その持つ能力を完全に發揮できるかが問題となる。

(C) この結果として、

(イ) 労働者にも經濟倫理が要求せらる。即ち國民的職分奉公の自覺と自重であつて、その身體も自己の一時的快樂のために損傷して能率を阻害すべきでない。軍隊における兵士の氣持で公益優先、義務本位の經濟倫理觀をもたねばならぬ。

(ロ) 企業家から云へば、労働者も國家からの預りものである。軍隊の將校と兵士との關係であつて、自己の雇傭人ではない。

(ハ) 國家から見ると、常にその労働の摩滅力を補償するを以て満足せず、いかにせば彼等の能率

を最大限度に發揮できるか。それによりて、國家の必要とする生産性を擴大強化できるかが問題となる。

社会政策と新労働政策 社会政策の觀念が右のやうに變化してきた結果は、從來見て以て社会政策と云つたものが、必ずしも眞の社会政策ではない。利潤を資本家と労働者が争奪する事を樞軸として考慮されたる社会政策、或は産業能率を中心とした社会政策はすでに消滅して、新なる指導精神の社会政策が出現せざるを得なくなつた。何ぞや。全體主義的生産力増大を指標とする労働力對策である。これを従來の語で社会政策といふよりは、寧ろ新労働政策と呼ぶべきであらう。

三 新労働政策の内容

新労働政策の本質がかくの如しとせば、これが基本條件たるものは次の如し。

(A) 適材を適所に置く爲に労働者の性能分析と、それに適應する職業及び職場との結合に關する實驗所の新設、國民學校教育者と職業紹介所との聯携其他。

(B) 一般的に労働能率の増進問題。年齢別・性別・體力關係などによる科學的研究。

(C) 職業及び職場の労働時間と最大労働能率との關係、その調査による労働時間の嚴守。

(D) 賃銀問題に就ては (イ) 賃銀と生計費の關係。 (ロ) 賃銀の高低限度、最低賃銀と最高

賃銀。 (ハ) 労働時間の長短、或は特別の苦難・危險——例へば鑛山——により賃銀に差異あるは

當然なるも、會社により或は無能力なるにも拘らず單に勤務年限による賃銀の差異は果して合理的なるか。(ニ) 家族數と賃銀との關係。(ホ) 均衡化是正。これ等について企業家と國家は、生産性の立場から種々の補助と均衡化是正對策を講ずべきである。

(E) 勞務者の名譽權。その一策として例へば賃銀は同一とし、生産能力の優秀なものは勞働勳章を與へ、更にその中の最高者は職能代表の名譽職を與へる。例へば指導者のブレイン・トラストたる地位及び直接に勞働代表として國策參加權。

第三 賃銀平衡資金

この他になほ勞働者が景氣・不景氣や或は會社の優劣により、その賃銀に差異あることは、物價高の一因ともなる。これを牽制するために賃銀平衡資金を設け、一には勞働者の一時的濫費を防止して物價昂騰を抑制し、二には後日の不景氣時に備荒貯蓄的作用をなし、三には公債消化力に貢獻せんが爲に、支那事變の勃發前、物價騰貴で賃銀引上げ問題の盛なりし折、去る昭和十二年六月、筆者はこれを新聞に載せ、さらに之を敷衍したものがあつた。「社會政策時報」昭和十二年七月號) 要旨は次の通りである。

一 物價騰貴率と賃銀上騰の關係

最近の物價暴騰は俄然賃銀爭議を頻發し、會て景氣回復のために好ましかつた物價騰貴も、今や生活不安の要因として、社會的に呪はれんとしてゐる。これが應急策として賃銀引上げも已むを得ない所であるが、同時にまたこれを機會にこの問題に對し再認識の必要は存するのである。

(イ) 物價騰貴率 まづ物價騰貴率であるがこれは卸賣と小賣と生計必需品とでかなりの相違がある。左の如し。(卸賣は明治三十三年、小賣は大正三年一〇〇)

	日銀調査	
	卸賣指數	小賣指數
昭和七年平均	一六一	一三七
十一年平均	一九八	一五九
十一年四月	一九二	一六〇
十一年十一月	二〇三	一五九
十二年四月	二四八	一七二
七年對十一年昂騰率	二三%	一六%
七年對十二年四月昂騰率	五四%	二六%

右の如く、本年四月の物價は昭和七年に對し卸賣は五四%高なるも小賣は二六%高に過ぎぬ。更に生計品に至つては十一年平均は七年に對し大阪市調査で一〇四對九〇即ち一五%高、この四月の一九二をもつてしても一七%高に過ぎない。

(ロ) 賃銀騰貴率 如上の生活費一七%高に對し賃銀は如何。この點に對し世上往々賃銀指數をもつてこれを證明せんとするも、これは必ずしも正當でない。何となれば賃銀指數なるものは、雇傭總勞働者の賃銀總計の平均額から割出される。従つてその定額(日給または月給等)たると實收(殘業手當及び賞與等の加算分)たるとを問はず、雇傭勞働者が増加せば勢ひ新參者若くは臨時雇の如き低収入者の増加により、その平均額は却つて低下する傾向をもつからである。殊に定額賃銀において然り、その代表的のものは機械製造業である。左の如し。(日銀調査、大正十五年一〇〇)

昭和六年	勞働人員	
	定額賃銀	實收賃銀
七年	九六	八九
九年	一〇〇	八九
十一年	一六九	八一
	二二二	七六
		九一

即ち就業勞働者は、十一年において六年に對し二倍以上なるに對し、定額賃銀は一七%の低落である。また實收賃銀も十一年は六年に比してこそ増加せるも、七年及び九年よりは低下してゐる。

むろん、不景氣が続くと合理化または求職者増加のために初級賃銀そのものが引下げられ、これにつれて雇傭人員減とともに賃銀指數も或程度に低下し、景氣上昇が続くとやがて勞働者拂底から雇傭人員増とともに賃銀指數も昂騰するに至る。最近はこれに近い。それにしても過渡期には景氣上昇とともに初めはむしろ賃銀指數は低下する。だが、このことは必ずしも昭和七年にすでに就業せる勞働者の賃銀が引下げられたのではない。その勞働者は多くこの間の生計費高たる一七パーセント位は實收若しくは定額給でも増加してゐよう。また家によつては當時失職状態の家族の一員が好況と共に就職し得て一家の總収入が増加し、そこで生計に餘裕の生じたのもあらう。

二 賃銀引上げが要求の根據

かやうに考へると、物價高と賃銀指數低落だけを比較して凡ての大衆が直ちに昭和六―七年より今の方が生活難に陥つてゐるとの結論は出來ない。

だが、現實問題として何となく生活難を感じるのには、賃銀収入の増加は半年または一年毎に徐々増加せるに對し、物價は最近の短期間に急騰したからである。故に昭和七年を基點として計算するとたとひ一家の収入増加率が同期間の生計費昂騰率より大であつても最近の三―四ヶ月だけで見ると生計費昂騰率が急増して収入は少しも増加してゐない。前の増給も物價不變と見て家計がたてられてゐるためである。これが何人にも物價高の敏感せられ、おのづから賃銀引上げの要求されるゆゑんでな

ければならぬ。

この點で筆者は、單に數年間の生計費昂騰率と實際總收入の増加比率の如何を問はず、最近の物價急騰に對し、賃銀引上げの妥當を否認する者ではない。ただ問題を個々の限局的に局限せず、全社會的に考へると再認識を要するものがある。

三 賃銀引上げの經濟的・社會的影響

賃銀引上げは應急策として一部階層には認めねばならぬが、さりとてこれを全社會に實行すると次の難問にぶつかる。

(イ) 全社會的賃銀引上げは生産高を招來する。これはいふまでもない事であつて製品はもとより製品用の原料でも機械でもその生産は多く勞力に基き全社會的に見ると生産費とは賃銀の集積ともいへる。従つて全般的賃銀高は物價高を更に甚だしくする傾向がある。

(ロ) 價格抑壓と生産減少による物價高。この場合に強ひて物價高を抑壓せんか、最も生産費の割高な限界生産者は賃銀高のために今までの利益が全くなり、勢ひ生産を中止せざるを得ない。しかるに一般の賃銀が物價高につれて引上げられたとせば、物の需要は一向に減少せず、物の供給のみ減少するから物價は躍騰せざるを得ないであらう。

(ハ) 物價高と輸出減、入超増。物價高もそれ自身は再び賃銀引上げで解決でき、その限り敢て恐

るべきでない。ただわが國の如く輸出増進によつてのみ經濟的發展も自給自足強化も可能なところでは、餘りの物價高は輸出不振と入超増から財界反動の因となり、折角の賃銀高も財界不況と失業増加により賃銀高を望んで得る結果は逆に皆無となるおそれも發する。

(ニ) 他階層・他部門との關係。物價高と共に賃銀引上げのできるのは、主として第一、二流の剩餘利益多き事業經營體であつて、賃銀を拂つて儲けがかつかつ三流、四流どころの限界生産者に働いてゐる連中は、たとひ示威運動をやつてもその目的は達せられない。やれば事業利益が無くなり事業がつぶれる心配が起る。しかるに第一、二流の事業従事者は、元來第三、四流の者よりその収入に恵まれてゐるのだ。そこで實は多少の生活引締め餘地ある部分が賃銀引上げの利益に浴し、本當に困つてゐる連中は指をくはへて垂涎する外はない。否、時には賃銀引上げの消費増による物價高のあふりすら喰つて一層困窮化する事さへある。

四 賃銀平衡資金を設けよ

そこで筆者は本資金の設定を提唱したい。それは凡て餘剩利益ある事業會社に對し、生計費の昂騰率だけその雇傭従業員に賃銀引上げを行つたものとして、その金額を日銀に供託せしめ、日銀はこれで赤字公債を買入れ、供託會社のために保管しておくのだ。そして一朝景氣反動に際し事業縮小、勞働者解雇或は賃銀引下げを餘儀なくされる場合にこれを引出して賃銀支拂に充當し、もつて解雇と賃

銀引下げを防止する。すると大衆の購買力も減せず、日銀庫中の公債は紙幣に變つてインフレともなり景氣反動の調節に貢献する所は些少でなからう。

社會局調査による十一年末の全國工場・鑛山・運輸・交通及び日雇労働者は、約六百萬人といはれる。その賃銀一日平均一圓、一年三百四十圓（休日除外）と見て賃銀支拂總額は廿億圓、これに商業關係及び労働者以外のサラリーマン等を加ふれば更に激増するであらう。

この中にはむろん最小賃銀の従業者もあり、これ等は除外されるから賃銀引上げの凡てが賃銀基金保留に向けられないが、假に最近の物價高により現給の一割引上げとせば廿億圓で二億圓、卅億圓で三億圓の平衡資金が積立てられ、それだけ毎年赤字公債の消化を助ける。他面において全國的には、第一年目に公債利子共に三億一千萬圓、第三年目には十億圓近くの不況對策資金が積立てられるわけである。これを前述の賃銀計算でゆくと三百萬人の労働者を一年間雇傭することができるとだ。

右は試案であつて實際にどんな結果となるか正確に豫想できぬが、何れにしても筆者の意圖する所は、賃銀引上げにより消費増から来る物價高或は生産費高から来る物價高を抑へ、わが國の貿易躍進根據を永續せしめ、同時に消費節約・赤字公債消化並びに不況對策にも資せんとするものである。そしてこれは獨り賃銀のみならず、株式の増配その他の所得増加にも廣く適用して、好況時における國民上下の消費増を抑制し、併せて不況時の消費減を調節せしめたい。

五 生活合理局を設置せよ

これと同時に生活合理局を生産合理局並びに産業科學試験所とともに、内閣下に設けて企畫廳と相並び、もつて國家及び地方自治體の豫算合理化とともに個人生活の全體的有機的合理化を研究することが必要である。

かの衛生省案の如きも生活合理化に包含し、衛生・栄養・衣住から生活方式の合理化までも纏めて総合的に研究さるべきだ。現に佐伯博士の栄養食普及は東京市の江東消費組合の工場配給、或は川口市或は埼玉縣農村その他で、生活費と栄養並びに手數その他の點でかなりの効果を擧げてきた。栄養部門はむろん、生活の全般的合理化も宛も産業合理化と同じくまだまだ研究餘地と實行方法が残されてゐるのではないか。

近く強化の運命にある輸入統制も、その十分な効果は國家・地方團體並びに各事業會社を初めずして全國民各個人がその消費節約若くは合理化をやつてのみ期待できる。従つてこの時に物價騰貴の解決を豫算膨脹と賃銀引上げのみに求めては、むしろ問題は逃げて行くのではないか。敢て粗案を提出して大方の教へを乞ふ所以である。

第四 サラリー・賃銀の公益性と均衡化

生産の要素は土地・資本及び勞力ではあるが、前述のやうに土地・資本の生産力を規定する最後のものは人間である。その心身能力である。これが生産形態として企業となるが、企業は之を細別すると企業家・サラリーマン——技術家と事務系統——及び狭義の労働者系統である。

この三種からなる廣義の労働體或は經濟活動體こそ企業であつて、企業の運営には、その何れの活動者をも缺くことができぬと共に、全體主義時代と同時に、彼等はすべて新時代の經濟倫理性が要請せらる。公益優先主義と利潤爭奪觀念の止揚、そして利潤も賃銀もサラリーも、その職分を果すための必要支出となる事である。

昔、石田三成は秀吉から貰ふ俸祿を私慾・私利に費消すべきでないとし、餘分を以て有能者を高祿で抱へ、以て萬一の場合に主家に役立つやうに用意したと云はれる。この心が今や吾々の受くる報酬のうちに生きかへらねばならぬ。

それと同時に報酬の均衡化が次第に實現されねばならぬ。その均衡が直接受取る金額の形であるか、租税で徴收の形であるかは別として、その均衡化運動がますます強くなるであらう。

第十三章 武装國家の建設

第一 國家財政の集中化

一 財政と經濟の協同化

戦争が總力戦化するほど財政支出は激増するが、それは國民經濟の生産物資をそれだけ需要することを意味する。いま昭和六年以來の歳出を軍事費と其他のものに内譯して示せば左の如し。(單位百萬圓)

	歳出總計	内軍事費	内其他
昭和六年度	一、四七七	四五五	一、〇二二
同七年度	一、九五〇	六八六	一、二六四
同八年度	二、二五五	八七三	一、三八二

昭和九年度	二、一六三	九四二	一、二二三
同 十年度	二、二〇六	一、〇三三	一、一七三
同 十一年度	二、二六二	一、〇七八	一、一八四
同 十二年度	五、一四八	三、七七七	一、三七一
同 十三年度	七、六九一	六、一三四	一、八一八
同 十四年度	八、七二六	六、四三二	二、二九四
同 十五年度	九、四〇五	六、七六四	二、六四一

(備考) 通抜勘定を除く。一般會計は昭和十三年度まで決算、他は豫算の數字。

軍事費の膨脹に基く如上の歳出膨脹こそは、國民經濟を刺戟し、わが生産力を増大し國民所得を増加した主因であるが、この主因こそまた他面において徐ろに物價高を進行せしめ、或は生産力を阻止し或は豫算の遂行すらも困難にする契機を育成しつつあつたのだ。

謂ゆる辯證法で量の増加も或る一定點に達すると忽然その質の變化を現出し或は要請するに至る。新體制の要請もこれを經濟的に云へばインフレの量の増加が、わが經濟機構の質の變化へと突然變異を示さんとするものに外ならぬ。曾ては國民經濟と財政は遊離してゐたが、今や國民經濟を離れて財政なく、財政を離れて國民經濟なく、ここにも兩者は一元化しその協同化が要求せられる。蓋し國民所得から財政の吸収する比率が増加するためであつて、總力戦或は全體主義の結果である。

二 國策の集中化

財政の國民經濟に對する比重が斯く強大なる結果としてその悪性インフレ化を防止する爲に考へられるのは次の三つである。

租税力とその基準 最近は増税に次ぐに増税であつて、十五年度豫算の租税歳入額は實に二十六億圓を算し、昭和六、七年の租税歳入額七億圓の四倍近く、十二年の十三億圓に對し二倍である。だが、之を歳出増加に對する比率から見ると、租税の役割は減じてゐる。公債によりて購はれる率が多いからであつて、一般會計歳出と租税歳入との比率は左の如し。(單位百萬圓)

	一般會計	歳收入	比率
昭和六年	一、四八九	七三五	五〇%
同 十一年	二、三一二	九二三	三八%
同 十四年	八、七二六	一、七四六	二〇%
同 十五年	九、四〇五	二、五八九	二六%

右表の示すやうに、その一般會計における租税比率は、昭和六年に五〇%のものが十四年は二〇%、十五年は増加してゐるが二六%に過ぎぬ。租税の歳出に對するかかる比率低下こそ悪性インフレの原因であるから、その防止には租税比率を歳出の五〇%にまで還元することがその有効なる作用たるを

失はない。

進んで之を國民所得より見るも、昭和六年には約百億圓、十四年は約三百億圓を超えると見られるから、之に對してその翌年の租税額に對比すると、昭和七年（國民所得は六年、租税は七年）が約七%、十五年の比率も約七—八%である。

だから、租税の徴收方法如何によつては、今でも歳出と租税との比率五〇%原則の堅持も困難でないが、それには所得増加の階層がいつこにあるか、先づその具體的事實を見透して、それに對する税源を求むべく、一般的に直接税とか間接税とかの可否論を以て之を觀念的に定めるべきでない。即ち増税の目標は（A）戦時所得の跛行狀の是正（B）剩餘購買力の吸収（C）増加所得の生産力化に置かるべきである。

政府の支出合理化の二種 支出の合理化にも二つの方法がある。その経費が時代に必要なものであるか否か。すでに時代的の意義は消失してゐるが、單に形式的に或は行懸りから、或はその人のために費消されてゐるのでないか。

一般會計と特別會計を通じて、百五十億圓豫算の中にはこんな無駄も全然ないとは斷言できぬ。否、叩けば壘の埃のやうに出るかも知れない。

合理化の第二は支出科目の使用方法を合理化することであつて、物並びに人について何れも最小費用で最大効用の擧がるやうに科學的能率化を圖ることである。恰も個人が同一費用でより榮養ある食

物を求めるとか、或はより少ない食物でしかも榮養を低下しない合理的生活を營むことが要求されてゐる如く、政府も各官廳もこの點に再吟味の餘地があらう。

一言で蔽へば豫算の科學化である。これには新なる技術的工夫が要るのであつて、ここにも専門家と官民協同の總力戰の姿勢がとられねばならぬ。

國策と政策の集中經濟化 如上の豫算合理化は國策並びに政策を前提とせる末梢的の合理化であるに對し、さらに積極的合理化は國策と政策の集中政策である。これも個人生活の眞の合理化が先づ自分の社會國家における存在理由を尋ね、次ぎに自己實力を檢討し、その間に自己の最高理想を樹立して、これに従つてすべての欲望と行爲を規正するのに似てゐる。

國家の國策にしても國民生活の安定や國家自身の發展があり、國家の發展にも内包的文化的發展と外延的地政學的發展とがある。その外延的發展も東・西・南・北、四方八方への可能性が考へられる。

だが、個人がさうである如く、大事を爲さんとする國家は、必ず一時一事にその國力を集中しなければならぬ。ヒトラーの成功秘訣は、軍事でも外交でも内政でもすべて集中主義を實行した結果にほかならぬ。

政策もさうであつて、一つの國策を實行するには種々の政策が組合はさるべきであらう。でも、それも實踐には時の先後あり終始・本末もある。強力國家の建設には思想から經濟・科學に及び、あらゆる政策の實施が必要なことは分るが、しかし之を一時に實行して果して効果的かどうか。例へば教

育にしても、肉體の鍛練と智力の練磨を同時に並行してやるべきか或は年齢其他に應じ、それぞれの發達段階に應じて一事に集中した方がより効果的でないか。ソ聯やドイツが四箇年計畫とか五箇年計畫とかを樹てる場合は、常に目標を一つにおき、集中的にその實現を期してゐるのは一考すべきことだ。これは國民精神を動員する効果から云つても、又豫算の使用方法から云つても、何もかにも總花的にして國民の心身及び物資の散漫化するのとその是非何れにあるか。説かないでも明かであらう。

新體制の眼目も實はこの國策の一元化、政策の集中化にあるのだ。然らずんば、いかに國民がその餘剩エネルギーを苦心して絞りだし、之を國家の獻げようとも、五指の交々ま^{こゝろ}ま^{こゝろ}まりなく^{はた}弾くに同じで、一本一本の指はいかに大きいと云つても、遂に頑とした一拳の打撃に及ばないのである。

新體制機構の必要とする一半は、國民の餘剩エネルギーを精力的に生産することであり、その他半は之を集散的・能率的に活用する事に存しなければならぬ。即ち今後の財政理念は國力の國策的運用にあり、これは經濟が政治に奉仕する現代の性格に基くのである。

今や大藏大臣が總理大臣となりし英・佛が没落し、財政技術には素人であるヒトラーのドイツが勃興するのも、眞の財政が過去の謂ゆる財政でなくて、國策の單一化集中化と政治や戦争の經濟化を證するものにほかならない。げに國策の經濟化こそ、強力國家の指導理念である。このライテンデ・イデーを忘れたる國家は、いかに自由主義時代の財政技術を丹念に精緻に運用するも、勞は過去に千萬倍して寸益もなし。國策と政策の多元そのものが基本的な自由主義の性格だからである。

わが國の過去がどうであつたかは茲に述べない。ただ、新體制の樞軸は何よりも先づこの國策この政策の經濟化を理念としなければならぬ。

第二 國土計畫

國土計畫とは何ぞや。それは國土の総合的合理的再編成である。この定義からして次の事が分明となる。

一 國土計畫の目標

國土計畫の目標も時代により國情により異なる。現代のごとき武装國家時代にはその計畫の凡てがここから割りだされなければならぬから、必ずしも生産的とか經濟的立場を固守できない。

重工業地の分散のごときは不經濟かも知れぬが、空襲に對する國土防衛の立場からは敢てこれを行しなければならぬ。また人口の都市集中のごとき之が産業的にはよし喜ばしき事であつても、一國の文化的觀點或は國民の保健的立場から好ましからざれば、又それぞれの立場で都市分散と農村強化を企圖しなければならぬ。

二 國土計畫の範圍

これも國の勢力圏如何によりて一定しない。例へばわが國の國土計畫は(A)理想として東亞大共榮圏にあり、日・滿・支と南洋を含めての國土計畫を樹立すべきも(B)差當りの目標としては日滿支或は日滿を範域として設計すべく(C)さらに現實問題として日本國だけを對象として考案されねばならぬ。

三 國土計畫と工業立地主義

國土經濟は右のやうに全體主義的に國家的立場から企畫されるものである。故に従來の謂ゆる立地理論 Standortslehre とは異なる。

立地論は工業立地論も農業立地論も主として一定の生産活動と一定土地(廣義に自然界を意味す)との最能率的な、殊に最近では最大利潤を得るやうな結びつきを發見せんとするものである。人絹工業の生産要素は、何がいかなる比重をもち、何處にその工場を置くのが採算的であるかを考へ、かの琵琶湖畔の石山に置かれたが如きである。但しこれも、石炭の安價な時代の立地觀であつて、石炭の高價な今では、水は少し位少なくてももつと石炭の入手し易い所が立地的かも知れぬが、何れにしても立地主義は利潤本位の私經濟的經營或はせいぜい局部的生産本位の觀點に立つに過ぎない。

國土計畫はこれに反して、獨りその生産性の配慮が全面的・綜合的なるのみならず、配給・消費はもとより、軍事・政治・文化及び厚生的立場すらも顧慮して、一國の物的資源と人的資源の合理的組合せと並びにその最高能率の發揮又はその生存發展を目指すのである。ただ時代と國情により、その重點に多少の差があるに過ぎぬ。それが現在では武装國家の建設におかれるのである。

四 各國の國土計畫

ソ聯・ドイツの國土計畫 國土計畫の重點は時と所により異なるが、その起源から見ると都市計畫にあり、次に産業政策にある。ソ聯の國土計畫は(A)農工業の聯絡(B)工場間の聯絡(C)工場と教育機關・研究所との連關(D)職業と住宅關係(E)それと聯關する文化施設などである。

ドイツは(A)原料及び食糧經濟(B)労働の調整(C)人口問題をも配慮した國土計畫である。
日本の國土計畫 日本のは内務省案や商工省案などその立場により、或は産業的であり或は防空的であり或は人口政策或は厚生的である。最近傳へられる政府案の要綱は次の如し。

國土開發計畫要綱

一、方針

日滿支を一環とする國防國家體制の強化を目的として國防、人口、經濟、政治、文化諸計畫を國土

との關係において調整し、綜合的かつ合目的に構成せんとするにある。即ち國土の綜合的利用開發、人と土地と施設の合理的配分を企圖するものである。

二、東亞圈における計畫

帝國を中心として日滿支三國を一環とする日滿支計畫を確立し三國は右の計畫を考慮しつつ各國の計畫を行ふが、帝國においては計畫地域を内外地の二地域に分つて行ふ。(イ)内地計畫は外地計畫と關聯を保ちつつ内地を地方別に區分し地方計畫として計畫を具體化する。(ロ)外地計畫は朝鮮、臺灣、樺太、南洋などを各單位地域として行ふ。

三、國土計畫の策定目標

(イ)國防||東亞共榮圈の保全を計る。(ロ)人口||質的量的増強を計り、都市、農村の人口配分と職業的、地域的の適正なる分布を期する。(ハ)文化||日本精神を中核とし健全なる日本文化の興隆を期するを目的とする。(ニ)經濟||東亞共榮圈における必需物資の自給自足と交流配分の適正を計り東亞經濟の獨立を目的とする。

四、主要策定事項

(イ)工業立地計畫||綜合的動力計畫、重化學工業および輕工業の立地計畫、地方特殊産業の保持。
(ロ)農業立地計畫||耕種別農業配置計畫。(ハ)交通計畫||内地鐵道道路港灣網を國土の合理的利用開發に相應して整備する一方東亞交通網の整備および通信網計畫。(ニ)水利計畫||治水、利

水、湖沼の利用開發計畫。(ホ)人口配分計畫||人口の無制限なる都市集中を防止し、都市と農村の人口配分を適正にし國內および東亞圈諸國への移民計畫を実施する。(ヘ)教育・文化・厚生施設の適正なる配分。(ト)行政區劃の整備計畫。

五、國土計畫實施機關と機構

(イ)本計畫は内閣總理大臣の所管とする。(ロ)内閣に國土計畫中央委員會を設置し計畫の中樞機關とする。中央委員會の庶務は企畫院これを司掌。(ハ)内地計畫の實施即ち地方計畫は内務大臣の主管とし、内務大臣は地方單位地域に計畫主體を造成し事務機關を置く。地方計畫は内務大臣がこれを決定し内閣の認可を受ける。(ニ)外地計畫は外地官廳の所管とし拓務省はこれが中央における連絡を掌り、關東州に關しては對滿事務局これが衝に當る。(ホ)内地計畫に關しては各廳はその所管に従つて計畫の内容たる事項の調査計畫實施に當る。

一方地方計畫に關しては、國土計畫の具體化として全國を北海道、東北、關東、東海、近畿、北陸、中國、四國、九州の九地方計畫、單位地域とする、地方計畫は内地計畫、東亞計畫と緊密なる縦の連繫を保持して實施する。

上案によると、やがて實施されんとするものが、その目標においても範圍においても頗る高大且つ綜合的のものと云へよう。

この國土計畫は實に國民再編成と相俟ち、ここに國土と國民の最大生産性と最高能率が發揮せられ、

以て他の大勢力圏と對抗するに足る國家エネルギーが創造せられんとするのである。

第三 民族設計

一 國力支柱の最後は民族

人口問題は國土計畫の中にも包含されるが、それは人口の都市集中など國土計畫と不可離の面を中心としたものである。

ここに民族設計を取上げたのは、一國の國力が、その國土の合理的編成、並びに國民の合理的組織に依存すると同時に、その國民を構成する細胞分子としての個人、その集合である民族の數量及び質——強弱と性格・才能等で決せられるからである。

國土と國民組織及び民族の質量如何は、一國の國力を形成する三位一體、といふよりも寧ろ基盤である。

いかに國土計畫が立派であり、國民組織が系統化されようと、もし之を構成する民族、その細胞たる個々人にして數少なきか或は質悪ければ、砂の上の城のみ。最近の歐洲各國はつきつきと眠のあたり吾々に之を實證したではないか。

何といつても一國の運命を決する最後のものは、その民族の能力である、實力である。

二 民族の數と質

民族の力はその數と質とであり、いかに質が優秀でも量が伴はねば矢張り没落の運命を免かれない。量については有名なるマルサスの人口論があり、人口は一、二、四、八と幾何級數的に増加するも、食物は一、二、三、四と算術級數的にしか増加しないから、人間は永久に食物難に悩み生存競争も已むを得ないと云つた。

だが、之も科學の發達しない十八世紀末頃の事で、最近では食物は豊富でも人口の増加しないフランスの如き國もある。

フランス人口減退原因 何故にフランス人口は増加しないのか。(A)ブドウ酒中毒説(B)文弱説即ち文明は個人的快樂或は名聲をのみ望んで子孫を輕視する傾向をもつ。(C)その遺産均分法と佛人の二兒制説——多くの子供を生むと子供の受ける財産が小分するから二人の子供で止めて置く風習。だが、筆者はこんな事が原因で、減産するのは既にフランス民族が意氣地なき隱居根性がある爲だと思ふ。フランスの一番華やかだつたのはルイ十四世時代であり、その元氣の最後はフランス革命で竭きた。

ナポレオンが餘りにその兵力を濫用して、歐洲征服のために約十五年間も戦つた結果は、數十萬或

は數百萬の立派な壯丁を喪つた。従つてナポレオンが最初にアルプス越えをした時の軍隊とロシアでその寒さに慄へた軍隊とはその體質に甲種と乙種位の差があつた。進んでワートルローで戦つた軍隊に至りてはロシアに行つた軍隊よりも更に低下した丙種の連中である。だから新手のウエリントンに負けたのは當然なのである。英國は陸軍として強くはないが、その軍隊はとにかく新手の甲種合格者であるのに、佛軍は丙種であるから、假令ナポレオンが戦略では巧妙でもその軍隊に粘りが無い。武器も大差なき當時であつて見れば、丙種の佛軍が體負けしたのも自然の數である。

その生き残りの丙種の子孫が十九世紀以降——の佛人である。英獨人よりも身體が遙に小さく且つ金勘定ばかりして産兒すらも節約しようとするのも餘儀なき次第だ。

第二次歐戰の佛敗亡の原因 佛國も十九世紀から第一次歐州戰までは大戰爭もなく——普佛戰爭では大した死者はない——漸くその民族的エネルギーを恢復したが、第一次歐州戰では八五〇萬人——全人口の約五分の一——動員されて死者一四〇萬、傷者四三〇萬人に及んだのである。民族的致命傷たるや云ふまでもない。それが戰後二十年目の今日再び起こつたのだ。戰鬪的氣魄なんて見出さうとしたつて有るはずはない。人間の數が揃つてゐず、六十近い老人も二度の勤めの應召である。第一次歐戰で人口多きドイツの死傷率は動員數の六五%であるのに、人口少なき佛の死傷率はその動員の七三%であつた。(1940. The World Almanac p. 860) 一九三八年十月調で、ドイツ(塊・ズデーテン包含)は七千六百萬、佛は四千萬、英の人口は四千七百萬である。

武器とか意氣とか國民組織とかを同じとしても、佛は固より獨の敵ではない。それは初めから分つてゐた。ただ頼みとするのはマジノ線だけであつたのだ。だが、それがあつた。

數の強さは印度と支那にこれを見る。そして之はまた東洋の強さの一面でもある。

各民族の質 質については今さら述べるまでもない。ただ、質について考ふべきは個人も民族も萬能でないから、凡そ強國と云はれ或は歴史の上で數千年も生き永らへてる民族は、そこに何らかの特長を持つてゐる事である。

だから、各民族とも能くその長短を吟味して、之をどんな風にどんな場面に發揮せば自國のためにも世界進歩のためにも、最大効率が擧がるかを考慮することである。

單に智能だけ見てもユダヤ人は獨創力に長じ、ドイツ人は論理的構想力に秀でてゐる。英・佛・伊人は何れかと云へばユダヤ的能力に近い。米國は歐洲人のルツボであるだけに種々の歐洲型を備へてゐるが、未だ渾然と融合してゐない。

日本人は世界無比の同化力をもつてゐる。これは獨創力と論理力が適當に混合したものであらう。これ等の何れが善いのであるか。それはその時代と國情にもよる事であつて一概に斷言できない。

三 民族強化運動

數の設計 民族の數の増加と質の向上は如何にすべきか。

(A) 結婚し易き經濟環境を與ふる事。

結婚獎勵金、或は家族數による賃銀・報酬割増金。租稅政策——獨身稅と多産者の課稅低減——産兒保護金などあるが、フランスはこの多くを實行したにも拘らず、人口が一向増加しなかつた。これは前述のごとく、佛人がすでに人生を戦ひぬき働きぬかうとする意氣を消磨し、小金こがねをためて吞氣のくに暮さうとする現狀維持的・快樂的人生觀に立つてゐるからである。

だから、この物質的保障は次の精神的支柱ありてのみ効果を擧げるのである。

(B) 創造的人生觀に立つ事。

即ち働くこと自身を楽しみ、何事かをこの世に建設しようとする若き民族、理想實現に健闘して、それを子孫に繼承せしめ、以て偉大なる民族の建設と莊嚴なる國家殿堂の構築に振ひ起つ氣力精神に溢れてゐる事である。

(C) 東洋民族の特異性。

東洋民族は歴史的に農耕民であるが、農耕民は祖先傳來の土地を受けつぎ、之を子孫に譲る。且つその耕作には手助け者の多きを利とし、勢ひ家族主義とならざるを得ない。日本や支那・印度が家族主義を社會生活の基本體とせるも、この爲である。

故に民族の數を論ずる場合には單に獨伊の増産的制度を模倣せず、この東洋的性格をいかに長養すべきかも考へ併せて支那・印度の人口増加の由つて來るところを調査・研究すべきであらう。

質の設計 民族は何故に各々その特長をもつか。それは云ふまでもない事だが、その風土・その生活様式・その歴史が不適者を淘汰してその適者を残す。残されたる生存の勝者たる男と女が、結婚して生んだ子供はますますその適性が一層遺傳的に強化するからである。

この遺傳的に強化された性格の子孫は、そこで再びその性格に適した生活様式を選び、さらにその環境に適者たる残存者の男女がその遺傳性を残すから一民族は一般的にその環境に適する普遍性もち、他の環境に残存せる民族の普遍性と特殊な性格をもつに至る。

これを小にして、謂ゆる家風といふが如きもそれである。家風に合はぬ嫁は離縁せられ、家風に適する嫁のみがその家の妻として子孫を残すから、その子孫はその家風を遺傳的に繼承し、そこで家風が固定化する。もしかかる家風が時代と國情に適するならば、その家族は繁榮するから、その家風はその民族の普遍的・代表的家風となり、結局それが民族性ともなるのである。

民族性は斯く環境と歴史の淘汰作用で遺傳的に築きあげられる。これ日本人と支那人とが肉體的に些ほどの相異もなく且つ生活基調を同一農耕に置きながらも、兩民族の性格には可なりの差異がある所以である。支那の歴史は民族相闘の連續史であつて、歴史から云へばむしろ歐洲人と似た環境を経る結果である。

生活基調は農耕であり、歴史的淘汰は興亡常なき歐洲的である。そしてその住む自然は瀰茫たるアジア大陸でもある所に現在の支那民族ができたと云へよう。

何れにしても遺傳性は環境の淘汰作用で發生した先天的固定性であつて、之を變更し助長し消失するものも主として遺傳則によるほかはない。謂ゆる優生學がこれであるが、人間の遺傳元素が多様複雑なだけにメンデル則を應用しようとしても、植物や動物のやうに公式が容易に發見されない。ただ、筆者の考へでは次の事が云へる。

(A) 或る甲、乙、丙なる兄弟の性格・才能・その他の心身素質は、ほぼその兩親、並びに祖父母(父系及び母系)の現はした心身の性質以外に出ない。換言すると甲乙等の兄弟は父か母か、父かたの兩親か、母かたの兩親かの六人から種々の心身的特質を繼承する。も一つ進むとその四人の祖父母の兩親たる大祖父母である八人の遺傳質を現はす事もある。謂ゆる先祖歸りといふのが是であるが、大概は兩親とその祖父母との六人の現はした才能・性行のどれかでその兄弟の素質は推知される。

その中の六人が凡て長命者であれば、その兄弟は凡て長命である。その六人の父系は長命だが、母系が短命だと、その兄弟の一部は長命で他は短命である。但し素質は長命でも或は流行病に傳染し或は特別の大酒其他の不養生で短命なのは後天的短命であつて素質的短命ではない。ちやうど頭腦のいい祖先をもつてゐたが、その生れた所が山の中であつた爲に遂に成功する機會がなかつたのと同じである。秀吉や野口英世の兩親或は祖父母には必ず頭腦のいい人がゐたに違ひないが、それを發揮する機會に恵まれなかつたから、秀吉や野口英世だけが突然土百姓の子から現はれたやうに見えるだけである。身長的大小から容貌の美醜、智力、性格など皆さうである。決して瓜のつるから茄子は出ない。

(B) ただ、兄弟姉妹の中でも甲は兩親・祖父母の善い所だけを受取り、乙は悪い所を集めて受取り、丙は善惡相半ばして受取る。そこで英雄とか天才のごとき元來が非常な長所と缺陷とを具備する人の子孫にはその缺陷の方だけを受取つたものは鷹の子に鶯が生れた結果になる。

(C) 日本民族は民族として肉體的・精神的に狂者とか異常兒が少ないのであるが、これは民族的に中庸と調和を得た粒揃ひなる事を示す。大惡漢もなく非常な小人こびともない事は、反對に異常者や巨人も外國ほどにない事になるが、一家の血統もさうであつて、たまたま狂人と低能が出たといふのでその家系を斷種することが果して民族發展のために善いかどうか。そんな家系には天才も出てゐないかどうかも再吟味しなければならぬ。

(D) 何故に或者は祖先の善い素質を受取り、他の者は悪い系統を受取るかは現在の遺傳學上なほ不明であるが、筆者の臆測では、その妊娠時の兩親の年齢健康及び精神状態——希望の滿々たる時と失意の時等——等によるのであらう。大酒家の子供はその父が大酒のために不健康になり易いから、祖先の悪い方を遺傳し易いが、いかに大酒家でも、健康を傷めてさへゐなければ遺傳的に惡影響もなすのではないか。

(E) かくて遺傳學の結論は、原則として一方的の偏人とか天才を生みたければ成るべく似た者が夫婦になれ。中庸的常識者を生みたければ心身の素質とも反對の者が夫婦になれとの結論となる。換言すれば身長の高い子供を生みたければ、共に身長のある男女が結婚すべきだ。むろん祖父母の關係

ですべての兄弟が一樣に高いとは云へぬが、二代三代と高い者同志が結婚して行けば、その子孫は凡て必ず高くなるであらう。

これは一例を身長にとつただけで、身長の高き者必ずしも頑健とは云へないし、智力優秀とも云へないから、また將來の機械化時代に果して適者であるかどうか、ただ一つの遺傳質を目標に人種を改善することは、それだけ他の缺陷も發現するから考へかたでは大いなる危険性も伴ふ。この點で現在わが國で問題となつてゐる斷種法のことときも慎重なる検討を要する。

(F) だから、斷種法の實行には、先づ日本民族の長短のみならず、來らんとする時代にはいかなる肉體といかなる心的能力あるものが果して適者であるか、又一方の長所を作るためにその犠牲としていかなる短所を受継がねばならぬか。これ等の分析と吟味を加へず、優生結婚さへすれば或る家系も日本民族も心身のすべてが何もかも改善されると思つては大きな思ひ違ひを來たすであらう。

一つの長所を獲得する爲には何物か失ふ所も覺悟しなければならぬ。これは宇宙の均衡則であり、生物遺傳の原則である。人間は聽覺や嗅覺或は視力で犬猫に劣る。だから智力で勝ることができたのだ。同じことは個人や民族にも云へる。

民族設計もまづその指導理念から決めなければ、謂ゆる優秀が必ずしも優秀でない。況んやその優秀を獲得する爲に何が失はれねばならぬか。現在の優秀者・天才について、いかなる天才はいかなる缺陷をもつかの心身能力の調査から着手すべきだ。

あらゆる建設は困難であるが、あらゆる建設を建設する人間と民族の建設は更に至難である。これさへ建設できれば他の建設は利鎌で草を刈るやうなものだ。

ドイツ國民は二千年來、歐洲の眞中にあり、四方八方に敵を受けて流離艱難の歴史に鍛へられて、今日のゲルマン民族を鍛造したのである。日本民族の建設には又何よりもかやうな歴史的斷種法即ち環境力による弱者淘汰が基本條件であらねばならぬ。世界歴史はいま日本に之を強ひようとしてゐるやうだ。

今こそ日本國民は力かぎり根かぎり働きぬき生きぬき戦ひぬく時だ。何人がこの強大な歴史の斷種法にかかつて淘汰されるか。それはお互ひに自己の力と信念を以て奮進するほかはないのだ。くじは人間が引くが、吉か凶か、それは歴史が審判する。この戦ひを戦ひとして喜び勇んで進む心こそ、今後の時代に何よりも要請される基本的な民族的性格でなければならぬ。そこにまづ歴史の手による斷種を受けるべきであらう。

第十四章 新體制構想の批判と眼目

第一 新體制の構想

一 新體制の意圖

新體制の理念が、内には高度工業國、外には大東亞圈の建設で以て強力國家を築き上げるにある事はすでに述べた。この政治・經濟的理念を達せんがために國力の餘剩力を可能的最大限度に産出せんとするのが新體制の構想である。

この構想を達するためには政治機構と經濟機構及び兩者を媒介し、併せて上意下達、下情上達の媒介者としての國民組織の三者を再編成しなければならぬ。

二 新體制の組立

新體制はかく政治・經濟及び國民組織の三本足から成るが、まづ政治機構から見よう。

新體制の政治機構 政治機構はまた内閣と行政機構とから成り、廣義には立法機關も包含すべきであらう。

(A) 内閣。全的綜合計畫を特に必要とする現代では(イ)總理大臣の權限を強化する事(ロ)國務大臣の數を減ずる事が絶対に必要である。獨・伊・ソ聯はもちろん、英・米すらも斯やうな傾向がある。

内閣は總理大臣と内務・外務・陸海軍・經濟・交通・文教に止める。

(B) 行政長官。國務大臣は成るべく少なきを可とするも、國務自體はますます膨脹するから國務大臣の下に數種長官を置くのは當然であらう。例へば内務大臣下には現在の内務・厚生・司法。外務大臣下には外務と拓務。經濟大臣下に農・工・商及び財政・金融。交通大臣下に鐵道・海運・航空・遞信。文教大臣下に教育・宗教・思想等である。

(C) 企畫院の改組。内閣下に内閣と情報局・法制局及び企畫院の四長官を置くは現在の通りなるも、企畫院を純粹の國策樹立機關とし、内閣のブレイン・トラストたらしむ。内部を企畫部と調査研究部とに分つ。調査研究部には統計局、文化科學及び自然科學研究所を置く。

企畫院研究所は日本の官民研究所の統制と指導を圖る。

企畫院は(イ)企畫院專屬官吏(ロ)他官廳との交流官吏(ハ)民間の知識・經驗家の登用と民間

調査機關との交流並びに參與(ニ)各官廳の調査局代表者を以て構成する。

(D) 各省の調査局完備。各省は各々調査局を置き、その独自の立場より國策樹立を期し、併せて各省長官並びに國務大臣のブレイン・トラストたる事を期す。

他面その代表者は企畫院の評議員又は參與として、企畫院會議に臨み、綜合的國策の練り上げをする。

各省調査局も亦民間の知識經驗者を適宜活用すべきである。

新體制の經濟機構 經濟機構は既に部分的には述べたが、之を要約すると次の通りである。

(A) 經濟活動大別。經濟界を經濟活動から大別すると、(イ)生産(ロ)配給、媒介作用として(ハ)金融(ニ)交通、最後に(ホ)消費である。

(B) 生産機構はまた(イ)農・林・水産(ロ)鑛(ハ)工業である。

(C) 各部門の小別。如上の農・工・商・金融及び交通の大部分を更に中別して纖維工業、鐵工業等とし、さらにその各々を小別して纖維工業中の紡績・人絹等とし、その同種産業を横に連結して組合的經濟團を作るは企業再編成の章で述べた所である。

(D) さらに同種織物業でも、その經營に大小の區別が甚しければ之を大企業團と中・小企業團とする。百貨店團と小賣商組合との如きも同じである。

(E) 地區別及び中央經濟會議所。如上の横の經濟團を一都市又は一群或は一府縣單位に凡て纏め

て經濟會議所(或は農林會議所を包含)を形成し、各地經濟會議の代表者は東京に於いては中央經濟會議(或は經濟協議會)を形成する。

(F) 官民の協同。この地方經濟會議所はその地方廳と、また中央經濟會議所はそれぞれの所管省の調査局と協同し、また經濟大臣所管の經濟會議と協同し、進んで企畫院會議にも參與又はその他の資格で國策検討に参加する。

(G) 經濟團と研究部。業別經濟團はすべて、それぞれ調査研究所を設け、その利益の一部を技術・經營合理化の研究費に充て、日本産業發展に資すると共に國策參加の下準備をなす。

(H) 指導者。指導者は下は一工場・一町村から、或は業別に或は地區別に、それぞれの實力者を選舉又は任命し、以て社會的名譽と國策參加權を與へて、從來その企業私益性から企業公益性・國家性に代へる。

(I) 従業員會議。指導者の企業指導を誤りなからしむるやうそのブレイン・トラストを作る。この指導者ブレイン・トラストは技術家・事務家・労働者から選抜し、員數は十名内外とする。

(J) 配給。(イ)對外的には貿易組合、(ロ)對内的には配給組合を組織する。

配給組合も業種別に細別するが、同じ配給でも原料其他は生産者への配給であり、食料其他は消費者への配給である。

消費者への配給中で切符制度のあるものは、町會や隣組との聯絡に便せんが爲に適宜の廣さの地區

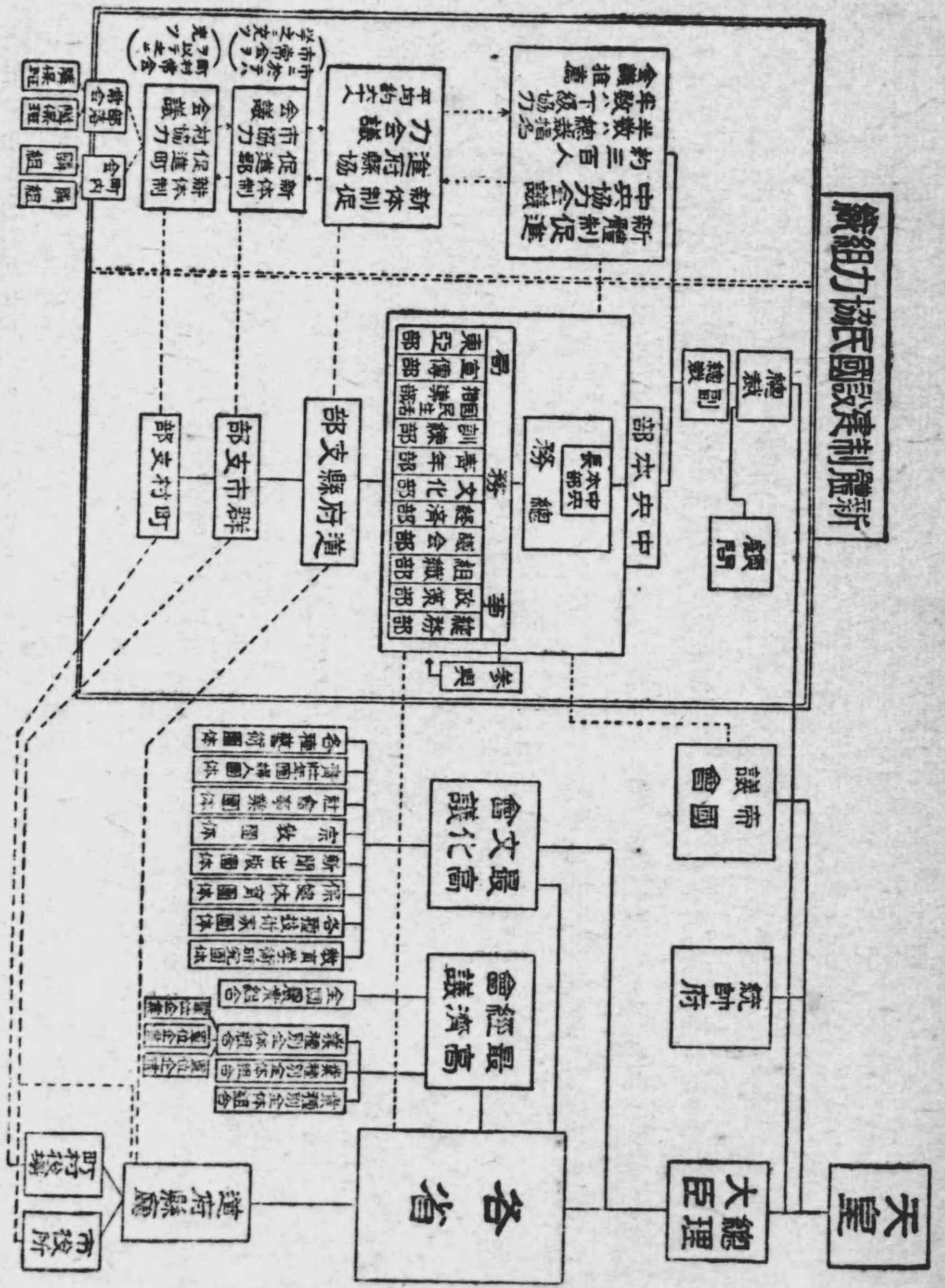
を一単位として組合を作る。

(K) 業者別組合及び消費経済向き組織たる町會・隣組は、協同組合として常に生産・配給・消費の合理化及び國策化を使命とする以外に相互扶助的役割を有する。例へば重點主義のために犠牲となる中・小企業家の後見。組合化による轉・失業者に對する保險作用・周旋などそれである。

(L) 町會・隣組費用。隣組・町會の事務増加と共に、その事務費並びに組長・町會長に慰勞金贈與に對し、各々組織員は納税額に應じ、適宜これを分擔すべく法制化すべきであらう。

(M) 切符配給手数料と物價調節資金。これ亦納税額に應じて切符配給手数料を徴し、その徴收金は寧ろ全國的に一律化し、それによつて切符配給品の物價高調節資金とする。例へば或る必需品増産の爲にどうしても若干公定價の値上げを必要とせば、その値上總計金額だけは、富者階級に納税額標準に適宜割當てる。その割當率は所管省がこれを決する。さうすれば物價高も賃銀階級に影響がなく、物價高と賃銀引上げとの悪循環からも免かれるであらう。

新體制と國民組織の問題 新體制の國民組織に就いては、大綱は去る九月四日の新聞に發表された。圖式は左の如し。



この圖式に對する富田書記官長の説明によると

(A) 國民再組織最後の目的は圖式の右半部を固めるにある。故に左半部はその完成までの運動組織である。

B) この左半の國民運動組織の右側にある總裁以下の一團を中核體といひ、上意下達を目的とする。左側は總裁の諮問機關で下意上達を目的とする。

新組織の批判 本案に對しては準備委員よりの質問もあつた通り幾多の問題が伏在する。

A 國民協力組織體と政府の關係。各省との聯絡が各省代表の參與が當るだけで完全であるか。結局「精動」と同じ運命に陥らないか。

(B) 總裁が總理大臣と運命を共にする事も、この組織體の價値を動搖せしめないか。

(C) 過渡的存在であつて、永久的でないやうな不安定感を國民に先入主せしむる事の是非。

(D) 議會並びに政黨とは法律的に關係のない事。新體制は憲法の範圍内で行はれ、議會の權限に増減はない。ただ、事實として議會人は事務局の議會部其他で活動を希望し、議員團を農林・商工・文化などに分ち、政府各省と連絡して議會の圓滑なる運用を期するやうである。

本組織が議會とも一應は沒交渉であり、政黨でもない結果は、議員の方から云つても、國民の方から云つても結局は道義的存在に終り易い惧れがある。

獨・伊の計畫經濟がうまく運営されるのも、國民組織が政黨であり、代議士はその公認候補であり、

同時に産業團とも不可離の關係にある爲にほかならぬ。それでこそ、政治と經濟とその指導者原理の三つがびつたりと呼吸を合はせる事ができるので。この難問をいかに解決すべきか。新體制の課題である。

(E) 議會と經濟團・文化團。本案では經濟團は最高經濟會議に代表者を送るも、それは政府の諮問機關であつて、運用は全く政府の手心で決まる。

これでは經濟團としても心もとないが、同時に議會としても權威なき政府の事務手傳ひに墮する恐れがある。

その結果は民意が二分して何れも帶に短し襷に長しの端したものに終る可能性もある。むしろ衆議院の半數にこの經濟會議員と文化議員を收納するか、或は貴族院を主として職能議員を以て充つべきであらう。

第二 過渡期の施設

いかに小なる機構の變化に於ても、その變化に伴ふ能率低下は過渡期の現象として已むを得ない。況んや國家御一新とも稱すべき大改革に於てをやである。

一 公益優先主義

その中で最も著しきは私益が公益に先だつの原則を、いつ全國民が守り負ふせるやうになるか、この編成替への途中において能率が衰へないかどうかである。簡単な一列行列すら全國のあらゆる場面で實行される迄には二三年もかかるのだ。況んや私益から公益優先のコペルニクスの轉向をやである。これには(A)社會教育と輿論喚起の徹底、(B)親切なる指導、(C)故意・惡意者に對する嚴罰主義の三者が並行して實行されると共に、更に必要なるは(D)公益優先による能率者の社會的表彰と名譽の贈呈であらねばならぬ。徒らに「可らず」主義と禁止・抑壓するだけでは効果がない。必ずその他方に抑壓に身代りする刺戟・獎勵・開放の場面を用意さるべきである。

二 轉・失業者對策

經濟團や小賣商の再編成と組合化その他で、そこに新しい失業者・轉業者が出るであらう。出ることは自身は合理化の結果であつて、むしろ國家的には期待された事である。

だが、かくも時代の暗い場面に廻り合はせたのも、全く國家躍進のためであつて、彼等も總力戦における名譽の一負傷でもある。

故に(A)生産面からは、まづ犠牲を出した産業團が彼をいたはるは固より、(B)消費面からは

町會・隣組も幾分の犠牲を負担すると同時に、(C)國家もまた之に對して責任を分たねばならぬ。そして彼が轉業その他によりて、ほぼ從來の生活を保障されるまで充分に導く義務がある。

過渡期の悩みは、尙ほこの他にいろいろ湧起するだらうが、如上(一)の積極的能率問題と(二)の消極的轉・失業問題は殊に最大の注意を以て對處されねばならぬ。

第三 新體制の眼目

いかに機構が完備しても、之を運用するのは人である。機構が精緻なほど、その操縦者も一層の熟練と熱意がなければならぬ。この點で筆者は日本國民とその指導者に次の考慮を求めたい。

一 國民に對して

日本國民は生々發展を生活指導原理とする國民である。従つて次の長短がある。

順應早き日本國民の長短 日本國民は同化吸収力が強く、それは環境に對する順應力の自在性をも語る。近衛公が一度び新體制を叫ばれるや、響きに應ずることく、或は待つてましたといふ調子で、右から左まで、上から下まで新體制を唱へて一人の異議者ない。誠に美はしく且つ羨まじきかぎりだが、ローマは一日にして成らず、もし一日にして成らば自然にバラツクのたるを免かれない。

だから、筆者は新體制の成らざるを憂へず、成りて固まらず、固まりて永續せざる事を憂ふるのである。聖戰第一年にして料理屋も宿屋も閑古鳥の鳴くかと惧れられたものが、戦ふこと三年にして、今度は逆にこれ等の歡樂場が餘りに狭きを案じられるに至つたその心持を患へる者である。

神話と科學性の混融 世界は何よりも科學的を要求する。新體制もまた國民組織の系統化・科學化でなければならぬ。

だが、日本には多分の神話がまだ残つてゐる。ここに筆者はくたくたくしき實例を挙げない。要は、(A)神話が科學を克服するか、(B)科學が神話を解消するか、(C)或は兩者の天衣無縫的混融であるか。

この三つの中の何れが來らんとする世界に適者たるべき基本的條件であるか、將またその何れが可能であるか。いまに於て同化と調和の天才者たる日本國民は、これを反省吟味してその態度をはつきりと決めるべきである。

二 指導者に對して

指導者の資格 歐米思想では公私の別が分明であつて、公的義務を完全に果すかぎり私的行動は必ずしも一々鑿穿しない。それでも指導者原理で立つ獨・伊は大指導者のヒトラー、ムツソリニーは固より、これに續く中・小指導者もそれぞれその人格と才能において公私ともに百人の長、千人・萬人

の長たるべき指導者らしさを持つてゐる。又さういふ人が指導者として立つてゐる。

ヒトラーのごとき實に英雄であり天才であると共にまた聖僧でもあるのだ。國家のために眞に滅私奉公、一命は常に國家に獻げてゐる。さてこそハイル・ヒトラーとしてドイツ國民渴仰のまゝとなつてゐるのだ。さてこそ統制經濟も全歐洲相手の大戦争も學國一致の體當りができるのだ。公私の權義が分명한歐洲でも尙且つ然りである。

昔から公私の隔てなき日本において、その指導者がその私行にありて百人・千人・萬人それぞれ長たる資格なき事を示さんか、いかに公的能力が優秀であつても、日本國民はもはやその指導者の命を奉じないのだ。これ亦特に日本の指導者が顧慮すべき大問題である。

いかに口で日本主義を唱へても、その部下を率ゐるためには、指導者自ら私を忘れ私を捨て、萬人環視のうちに先頭に立つて進め進め!! 來れ來れ!! と身を以て行動を以て、その智その勇その捨身の態度を垂れるべきである。然らずんば新體制も魂なき佛に終るであらう。

快打を飛ばせよ 時代はいま建設時代であると共に疾風怒濤時代でもある。こんな時に民意とか輿論とかは大して役に立たない。輿論は元來、批評的・破壊的のもので建設的のものでない。日本國民の各々に外交政策を聞いた所で、インフレ政策を相談した所で實は建設的な何ものも出ない。出ないのが當然なのである。彼等は毫もその専門家でないからだ。

これが現代において個人主義・自由主義の輿論の國がつつぎと倒れて、英雄と天才の獨裁國・指

導者國の起る所以である。

だから、新體制により若しそれで正確な國民輿論を察知し、そこから國策や政策を樹立しようと思えば、それは新體制樹立のそもその趣旨と反對なのだ。

新體制の新體制たる眼目、効用はそれぞれの善き指導者を發見する、隠れたる實力者を隣組からも發見して引上げる所にあるのだ。

そして一度び指導者となつた以上、その指導者は自己の心身と精神、その智勇才能を凡て打込んでその信する所に突貫すべきだ。そして失敗せんか潔く職場で倒れるか或は割腹すべきである。

かくて弱者と無能者は倒れて實力者のみが残り或は實力者が浮び上がる。國家はそこから始めて世界的大道へと驀進できるのである。

ヒトラーの如く、言ふところを必ず行ひ、行ふところを必ず成しとげる。國民は之を神格視して、彼の命するところ水火を顧みず飛込むに至る。ここに統制の秘訣がある。

徒らにまとはづれの形式論や上皮論に囚はれて、その骨髓を透察しその急所を突き刺す行動力を持たないものは、新體制のフニラーたる資格のない者だ。かやうな缺格者が傲然と指導者の地位にあらんか、それは獨り本人の不幸ではない。國民と國家の大いなる不幸である。

新體制において、わが國民にとり何よりも肝腎なことは立派な指導者を戴くことであり、指導者として肝腎なことは指導者らしく振舞ふことである。然らずんば、その職域を通して潔く自己の無能を

天下に謝して善處すべきだ。これが日本精神である。

國民にしてこの日本精神を問題とせず、指導者として自ら顧みてこの日本精神を忘れるところ、新體制の結構はいかに莊嚴を極めようと、畢竟これ砂上の樓閣に終らんのみ。

新體制の經濟



滿洲・朝鮮・臺灣・樺太等の

外地定價八十五錢

* 落丁・亂丁の際は直接本社にてお取替へいたします。

昭和十五年九月十五日 印刷
昭和十五年九月二十日(戰時體制版)初刷三萬部發行

定價七十八錢

著者 高木友三郎

刊行者 長谷川巳之吉
東京市麹町區三番町一

刊行所 第一書房
東京市麹町區三番町一

電話九段三四一五
電話九段三三四四

牛込區山吹町三ノ一九八
印刷者 萩原芳雄

戦時體制版の宣言

第一書房 長谷川巳之吉

此度計らずも杉浦重剛先生の「選集倫理御進講草案」を戦時體制版として刊行するの光榮を擔ふに當り、いささか戦時體制版發行の趣旨・抱負を宣言いたします。

凡そ出版の事業たる一國文化のパロメタアを成すは言ふまでもありませんが、特に現下の如き戦時下の非常時局に當つては、その責務益々重大なるを自覺し、茲に物資經濟の根幹を成す用紙統制に則ると共に、大局からの國策に順應する新日本文化の創造に進んで協力寄與すべき決意愈々固きを信じてやまない次第です。私は第一書房設立以來十五年、一意或る理想をもつて出版を續けて來たのでありますが、特に今日に於いて一層、良書出版の意義とその必要の大なるを思ひ、出版報國を第一義とする戦時體制版の刊行に邁進するに至つたのであります。

現代日本の出版界はその量に於いて、又種類に於いて世界の出版國の一つであると言はれて居りますが、

その質に於いては果して何うでありませうか、名を大衆にかりる俗悪趣味横溢の娛樂雜誌や婦人読みもの類の跳梁跋扈は、どう最眞目に見ても一國文化の伸長にプラスするものとは考へられないのであります。惟ふに大衆化とは徒らに大衆に阿ねる事ではなくして、實に名著をもつて大衆を引き上げる事ではなくてはならないと信じます。それ故に、私は此の戦時體制版を引提げて敢然と之れに對處しようと思つたのであります。従つて本體制版はその點・特に留意して、今日及び今日以後の日本人が、日本人として起つ上には是非とも必要な萬人必讀の書を、精神の糧として供給することをもつて使命とするものであります。

斯くして自然・本戦時體制版は、思想・藝術・宗教等の文化の各方面に涉つて、古今東西を通じて現代日本に最も緊要にして重大意義ある名著のみの普及を計るものであります。

今や史上未曾有の重大時機に際會してゐる私達は、國をあげて長期建設に邁進して居ります。而も戦後と雖もなほ國力總動員を要し、所謂「常在戰場」の氣力が飽くまで必要であることは言ふまでもなく、私達が聲を大にして本シリーズを戦時體制版と呼號するのも此の意味に外ならないのであります。我々は更らに前線統後を打つて一體に結び、これをもつて事變中の用意修養に資し、戦後の準備を怠らず、日本人としての確乎たる脊骨と肚とを養つて新日本文化の建設に資し、進んでは來るべき東洋文化ルネッサンスの分擔者たるの實をあげたいと念じてやまない者であります。茲に微意を披瀝して天下幾百萬讀書子の聲援を冀ひ、熱意ある支持を衷心より希望してやみません。(昭和十三年九月)

第一書房戰時體制版各冊 四六版七八錢

杉浦重剛撰 選倫理御遺書草案

大川周明著 日本二千六百年史

小泉八雲著 神國日本

川田順著 幕末愛國歌

林權助述 わが七十年を語る

室伏高信 安部磯雄
中川善之助 阿部知二
高木友三郎 共著
高神覺昇 共著
戦後の思想問題

伊藤竹之助 武内文彬
山内 貢 栗本勇之助 共著
戦後の財政經濟對策

高神覺昇著 般若心經講義

高神覺昇著 苦惱を超越するもの

山田靈林著 學讀本

土田杏村著 人生論 宗教論 人間論

土田杏村著 戀愛論 結婚論 遺傳論

陶山新朗述 哲學夜話

パール・バック 大地第一部

同 大地第二部

同 大地第三部

弓館芳夫譯 西遊記

弓館芳夫譯 水滸傳

新居 格 農民 第一部 秋の巻

阿部知二 農民 第二部 冬の巻

伊藤 整 農民 第三部 春の巻

新居 格 農民 第四部 夏の巻

大田黒元雄著 新洋樂夜話

大田黒元雄著 レコード音楽案内

田部重治著 山と溪谷

林房雄著 小説 青年

林房雄著 小説 壯年

林房雄著 小説 大陸の花嫁

鎌田研一著 小説 石川啄木

長谷川 巳之吉編 國木田獨步 遺命論者

新居 格編 支那在留日本人小學生 綴方現地報告

木村毅編 支那紀行

片岡政一著 戦時下に於ける 國民の税法

室伏高信譯 ヒットラー我が國

後藤末雄著 支那四千年史

15921

